
令和7年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業 (地域課題対応支援事業)

みんなのMuseum プロジェクト

令和7年度 実施報告書



「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会

Index [もくじ]

はじめに	1
～Museumが地域をつなぐ～みんなのMuseumプロジェクト 概要図	2
I ～Museumが地域をつなぐ～みんなのMuseumプロジェクトについて	4
1 概要	4
2 当館及び関係機関の役割	5
3 活動実績	6
II 令和7年度の取り組み	8
1 隔たりのない、誰もがつながるプログラムの企画と運営	8
2 地域の課題と魅力の発掘ワークショップ	18
3 多様性と包括性の高いコミュニティづくりを担うMuseumを目指した取り組み	21
4 博物館施設における共生社会に担い手を育む交流及び共同学習	24
5 鑑賞支援ツールやメタバースなどの活用などによるユニバーサルな鑑賞プログラムの構築	26
6 人と地域をMuseumでつなぐ取り組み	31
7 プロジェクト企画展：誰もがMuseumを楽しみ、Museumを通じて出会い、学び合い、つながる場の創出	33
8 取り組みの評価とフィードバック、アーカイブの公開	49
III 成果と課題・今後に向けて	50
要綱	52
あとがき	55

はじめに

「秋田県内小中学校の不登校者数が2千人を超え、9年連続過去最多を更新。」「秋田県の人口に占める65歳以上の割合が4割を超え、高齢化率全国トップ。」(両件令和7年発表)

地域の課題がこのような加速の度を増大させる中、博物館施設の使命も当然変化を余儀なくされます。そもそも地域課題は様々な要因の複合体である以上、その解決は複数分野が専門性を駆使して連携し、初めて解決への糸口がつかめるものでしょう。改正博物館法を引き合いに出すまでもなく、公的博物館施設に、インクルーシブ性や、他博物館・他主体との連携による地域活性化への参画が求められることはある意味必然でしょうし、地域コミュニティの希薄化が進む今だからこそ、Museumは、文化鑑賞の場でありつつ、人をつなぎ、そのつながりで生活や地域に灯りをともし拠点として機能しなければなりません。今、Museumにできることは何か、その命題に真っ向から挑戦したのが今回のプロジェクトとなります。

このプロジェクトは、令和5年度に「みんなのキンビ」プロジェクトとしてスタートし、地域の多様な主体との連携・協働により、年齢や障がいの有無にかかわらず、誰もがアートを通じて、楽しみ、出会い、学び合い、つながる、そんな場の創出を目的とした3年計画の取り組みです。3年目の令和7年度は、名称を「みんなのMuseumプロジェクト」に改め、秋田県立近代美術館を核に、秋田県立博物館、秋田県立農業科学館、秋田県立美術館の県内4つの博物館施設が連携し、人々の孤独・孤立、障がいのある方の生涯学習、高齢者支援などの地域課題に包括的に対応するモデルの創出を目指しました。

特に今年度は、美術・教育・産業技術分野との連携に加え、福祉行政との協働が進み、美術館単独ではつながりを持ちにくかった若者や精神に障がいのある方、認知症を含む高齢者など、社会的に孤立しがちな人々へのアプローチが可能となりました。文化芸術を通じた支援の可能性が広がり、社会的処方¹の基盤が形成されつつあります。また、県立博物館施設各館が有する専門性や資源を生かし、多様な来館者のニーズに応じたプログラムを協働で開発するなど、分野横断的で持続的な連携体制の構築に向けた取り組みも進展しました。

昨今、多方面で分野横断や連携・協働が声高に叫ばれることは、とりもなおさず、現代社会においてそれを成し遂げるのは容易ではないということの逆説的証左であり、多様な主体との連携は、社会構造上決して簡単なことではありません。しかしながら本プロジェクトは、喫緊の地域課題を「自分事」として捉える多くの人・主体に支えられつつ手をつなぎ、地域の人たちを「笑顔」にしたいという「思い」と「熱量」と「縁」をつなぎながら、ゼロではない確実な一歩を踏み出し続けてきました。まだまだ荒削りな面は否めませんが、今後も地域の文化的インフラとしての機能を高めるべく挑戦を続けていきます。本冊子が、令和7年度の活動の周知と、それぞれの地域が抱える課題解決の何らかの参考に、ひいては日本に暮らす一人一人のウェルビーイングにわずかでも資するものとなれば幸甚です。

令和8年3月

「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会会長
(秋田県立近代美術館・副館長)

土門 高士

～Museumが地域をつなぐ～みんなのMuseumプロジェクト

プロジェクトテーマ「Museum×社会包摂×文化芸術」

本プロジェクトは、これからの博物館に新たに求められる社会や地域における様々な課題に対応する取り組み、博物館の組織連携・ネットワークの形成を通じた課題解決への取組への支援を通じて、博物館の機能強化の推進を図る「Innovate MUSEUM事業—地域課題対応支援事業」(文化庁)に採択され、「みんなのキンビ」プロジェクトとして秋田県立近代美術館を中核に令和5年度から取り組んでいるものです。3年目となる令和7年度は「みんなのMuseumプロジェクト」と名称を新たに、取り組みのさらなる展開、深化を目指します。

目的

本プロジェクトは、地域の様々な主体との連携・協働により、年齢や障がいの有無にかかわらず誰もがMuseumを楽しみ、Museumを通じて多様な人々が出会い、学び合い、つながる場を創出することを目的とした取り組みです。令和7年度は、特に現代社会が抱える孤独・孤立対策、「障害者の生涯学習」の充実などの地域課題に対し、秋田県立近代美術館を中核とする4博物館施設の連携・協働による、Museumの力で包括的に対応し、地域活力を高めるモデルの創出を目指します。

背景

改正博物館法施行(令和5年4月)によって、美術館や博物館には、新しい価値の創造や社会包摂など、多様な地域課題解決への貢献等の役割が求められています。

誰もが生涯を通じて文化や芸術を楽しみ、地域や他者とつながることで心豊かな生活ができるように、Museumに親しむ環境を整え、多様な人との対話の場や社会参画の場をつくりまします。



令和7年度の 主な事業内容

隔たりのない、誰もがつながる プログラムの企画と運営

- 社会的に孤立しがちな方を対象に、多様な機関と連携・協働し、鑑賞や創作などの活動で地域の人や社会とのつながりをつくるプログラムの企画と運営を行います。

秋田の魅力の発掘ワークショップ

- 博物館施設と伝統文化継承団体等との協働による、文化的なコミュニティづくりを推進します。

不登校など社会的に孤立しがちな 子ども・若者との活動

- 不登校など社会的に孤立しがちであったり、文化芸術にふれる機会が少なかったりする子ども・若者を対象とした鑑賞や創作活動、交流活動を実施します。

共生社会の担い手を育む 交流及び共同学習

- 博物館施設が地域の各学校(園)、特別支援学校と連携し、交流及び共同学習を実施します。

鑑賞支援ツールやメタバースなどの 活用によるユニバーサルな 鑑賞・創作プログラムの構築

- 障がいのある方へのアクセシビリティ向上と、多様な人と一緒に鑑賞する機会の拡充を目指し、鑑賞支援ツールやメタバースなどを活用した鑑賞プログラムを構築します。

- ICTを活用し、障がいのある方に向けた鑑賞や創作の講座を開催します。

人と地域をMuseumでつなぐ取組

- Museumを拠点に「出会い」や「学び」の機会を作り出していくコミュニケーターを育成します。秋田県立近代美術館を拠点に、人とアートのつなぎ手として能動的に活動するキンビコミュニケーターの育成とスキルアップを目指した研修会を開催します。

プロジェクト企画展：

誰もがMuseumを楽しみ、Museumを通じて
出会い、学び合い、つながる場の創出

- 多様なもの見方や捉え方、背景への思索を深められる展示空間と、誰もが安心して表現し、対話できる場を創出します。

「みんなのMuseum企画 まるごと〇展」

【会 期】令和7年9月13日(土)～11月9日(日)

【会 場】秋田県立近代美術館 5階展示室

- 博物館等へ出向くことが難しい福祉施設の利用者を対象に、農村風景の写真や民具の展示、対話による鑑賞を楽しむ機会を提供します。

県立博物館施設による出張連携展

「ミュージアム連携出張展『昔のくらしと道具』」

【会 期】令和7年10月10日(金)～10月31日(金)

【会 場】秋田県南部老人福祉総合エリア

- 通信制高校の生徒たちと地域の方々とのアートを通じた交流の機会を創出します。

「出前美術展inさくら国際高等学校秋田キャンパス」

【会 期】令和7年10月16日(木)～10月21日(火)

【会 場】さくら国際高等学校秋田キャンパス

- 病気などの理由で美術館に来館することが困難な状況にある人に向け、美術鑑賞の機会を提供します。

「出前美術展in秋田大学医学部附属病院」

【会 期】令和7年10月22日(水)～10月24日(金)

【会 場】秋田大学医学部附属病院

本書は「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会による「～Museumが地域をつなぐ～みんなのMuseumプロジェクト」の、令和7年度の取り組みの成果報告書である。本事業並びに本書の発行は文化庁の「令和7年度Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）」の助成を受け実施した。

「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会

会長	土門 高士	秋田県立近代美術館・副館長
副会長	安藤 郁子	NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事 秋田公立美術大学・教授
委員	梅津 葉子	横手市市民福祉部まるごと福祉課包括ケア推進係・保健師副主幹
委員	内田富士夫	秋田県産業技術センター 先進プロセス開発部・部長
委員	瀬川 侑	秋田県産業技術センター 先進プロセス開発部・研究員
委員	岸上 恭史	秋田公立美術大学附属高等学院・教諭
委員	柴田 豪	秋田県立横手支援学校・教諭
委員	糯田亜希子	秋田県立増田高等学校・教諭
委員	黒川 陽介	秋田県立博物館・学芸主事(兼) チームリーダー
委員	照井 梓	秋田県立農業科学館・学芸主事
委員	小泉 俊貴	秋田県立美術館・学芸員
委員	内田 鉄嗣	秋田県教育庁生涯学習課・課長 秋田県立近代美術館・館長事務取扱
事務局	木村 雅洋	秋田県立近代美術館・主任学芸主事(兼) チームリーダー
事務局	保泉 充	秋田県立近代美術館・主査(兼) 学芸主事
事務局	照井 裕奈	秋田県立近代美術館・主任
事務局	北島 珠水	秋田県立近代美術館・学芸主事
オブザーバー	長谷川 工	秋田県教育庁生涯学習課・主任学芸主事



～Museumが地域をつなぐ～

みんなのMuseumプロジェクトについて

1.概要

本プロジェクトは令和5年度に「みんなのキンビ」プロジェクトとして、地域の様々な主体との連携・協働により、年齢や障がいの有無等にかかわらず誰もがアートを楽しみ、アートを通じて多様な人々が出会い、学び合い、つながる場を創出することを目的とした3年計画の取り組みとしてスタートした。

3年目となる令和7年度は、「みんなのMuseumプロジェクト」と名称を新たに、秋田県立近代美術館を中核とする県内4博物館施設と地域の様々な主体が連携・協働し、現代社会が抱える孤独・孤立対策、障がい者の生涯学習の充実などの地域が取り組むべき課題にMuseumの力で包括的に対応し、地域活力を高めるモデルの創出を目指し取り組みを展開した。

文化庁「Innovate MUSEUM事業（地域課題対応支援事業）」の助成を受け、令和7年度は以下の事業を実施した。

(1) 隔たりのない、誰もがつながるプログラムの企画と運営

- ・「みんなのMuseum研究会」の実施
- ・不登校など社会的に孤立しがちな子ども・若者との活動「キンビ美術部」の実施
- ・多様な方とのアート鑑賞プログラム「Artrip」の実施
- ・博物館教室「60年前の秋田 モノや写真で思い出を語り合う会」の実施

(2) 地域の課題と魅力の発掘ワークショップ

- ・美術家 藤浩志氏による「めぐるいきものもり」ワークショップ
- ・版画家 伊藤由美子氏による「勝平得之と私」語りと版画のワークショップ

(3) 多様性と包摂性の高いコミュニティづくりを担うMuseumを目指した取り組み

- ・秋田県難聴者・中途失聴者協会との合同研修会
- ・うちのあかりの対話ラボ

(4) 共生社会の担い手を育む交流及び共同学習

- ・秋田県立横手支援学校と秋田県立増田高等学校、十文字和紙愛好会による交流及び共同学習
- ・秋田県立大曲支援学校と秋田県立大曲農業高等学校による交流及び共同学習

(5) 鑑賞支援ツールやメタバースなどの活用によるユニバーサルな鑑賞・創作プログラムの構築

- ・聞こえづらい方との対話による鑑賞を考えるワークショップ
- ・「人面付環状注口土器」レプリカの作成
- ・ICTを活用した障がいのある方の生涯学習講座の開催

(6) 人と地域をMuseumでつなぐ取り組み

- ・キンビココミュニケーターの活動

(7) プロジェクト企画展:

誰もがMuseumを楽しみ、Museumを通じて出会い、学び合い、つながる場の創出

- ・「みんなのMuseumプロジェクト企画 まるごと〇(まる)展」
- ・秋田県立博物館施設による出張連携展「ミュージアム連携出張展『昔のくらしと道具』」
- ・「出前美術展inさくら国際高等学校秋田キャンパス」
- ・「出前美術展in秋田大学医学部附属病院」

(8) 取り組みの評価とフィードバック、アーカイブの公開

- ・実行委員会の開催 (①「計画の策定と評価方法、目標の共有」、②「評価とフィードバック、事業継続に向けた改善策提案」)
- ・各事業の記録映像の制作と公開

2. 当館及び関係機関の役割

■ 秋田県立近代美術館 [中核館]

- ・プロジェクト全般の渉外事務、事業の進行管理と調整企画、人材の育成と実践の支援

■ 秋田県立博物館、秋田県立農業科学館、秋田県立美術館 [博物館施設]

- ・プロジェクトの協働

■ NPO法人アートリンクうちのあかり [障がいのある方の生涯学習支援]

- ・スキームの提言、プロジェクトの協働

■ 秋田県産業技術センター [技術改善・開発支援]

- ・スキームの提言、プロジェクトの協働

■ 横手市市民福祉部まるごと福祉課 [横手市福祉行政]

- ・スキームの提言、プロジェクトの協働

■ 各学校 [文化芸術による交流及び共同学習]

- ・共生社会志向の気運醸成、交流及び共同学習の実施

3.活動実績

分類

- 1 隔たりのない、誰もがつながるプログラムの企画と運営
- 2 地域の課題と魅力の発掘ワークショップ
- 3 多様性と包摂性の高いコミュニティづくりを担うMuseumを目指した取り組み
- 4 共生社会の担い手を育む交流及び共同学習
- 5 鑑賞支援ツールやメタバースなどの活用によるユニバーサルな鑑賞・創作プログラムの構築
- 6 人と地域をMuseumでつなぐ取り組み
- 7 プロジェクト企画展:誰もがMuseumを楽しみ、Museumを通じて出会い、学び合い、つながる場の創出
- 8 取り組みの評価とフィードバック、アーカイブの公開

日にち(R7)	分類	内容	場所
5月18日(日)	5	視覚障がい児が使えるインクルーシブアート教材研究会	手と目で見る教材ライブラリー
5月20日(火)	8	大曲ロータリークラブ例会スピーチ	グランドパレス川端
5月29日(木)	1	みんなのMuseum研究会	秋田大学
6月21日(土)	6	キンビコミュニケーター①キックオフイベント	秋田県立近代美術館
6月27日(金)	1	キンビ美術部①	横手高等学校定時制課程
7月 7日(月)	4	横手支援学校と増田高等学校、十文字和紙愛好会との交流及び共同学習①	オンライン
7月 8日(火)	7	さくら国際高等学校秋田キャンパスとの交流	さくら国際高等学校秋田キャンパス
7月 9日(水)	4	大曲支援学校と大曲農業高等学校との交流及び共同学習①	大曲農業高等学校
7月12日(土)	3	秋田県難聴者・中途失聴者との合同研修会	秋田県立近代美術館
	6	キンビコミュニケーター②対話型観賞講座、自主企画ワークショップ(彫刻鑑賞)	秋田県立近代美術館
7月15日(火)	1	キンビ美術部②	南かがやき教室、東かがやき教室
	4	大曲支援学校と大曲農業高等学校との交流及び共同学習②	大曲支援学校
7月17日(木)	4	横手支援学校と増田高等学校、十文字和紙愛好会との交流及び共同学習②	増田高等学校
7月22日(火)	1	キンビ美術部③	西かがやき教室
7月23日(水)	1	キンビ美術部④	横手市交流センターY ² プラザ
7月31日(木)	1	キンビ美術部⑤	横手市生涯学習館Ao-na
8月21日(木)	1	精神障がいのある方・認知症の方とのアート鑑賞	秋田県立近代美術館
9月 4日(木)	4	横手支援学校と増田高等学校、十文字和紙愛好会との交流及び共同学習③	秋田県立近代美術館
9月 5日(金) ～9日(火)	2	藤浩志作品を一緒につくるワークショップ	秋田県立近代美術館
9月 8日(月)	1	キンビ美術部⑥	秋田県立近代美術館
9月10日(水)	4	大曲支援学校と大曲農業高等学校との交流及び共同学習③	大曲農業高等学校
9月13日(土) ～11月9日(日)	7	「みんなのMuseumプロジェクト企画 まるごと〇展」 ・オープニングイベント(13日) ・《めぐるいきものもり》の変化を楽しみ観察するワークショップ～11月9日(日)	秋田県立近代美術館
9月20日(土)	2	伊藤由美子氏による「勝平得之と私」語りと版画のワークショップ	秋田県立近代美術館
9月28日(日)	6	キンビコミュニケーター③自主企画ワークショップ	秋田県立近代美術館
10月4日(土)	1	60年前の秋田 モノや写真で思い出を語り合う会	秋田県立博物館

日にち(R7)	分類	内容	場所
10月10日(金) ～31日(金)	7	県立博物館施設による出張連携展 「ミュージアム連携展『昔のくらしと道具』」	秋田県南部老人福祉総合エリア
10月11日(土)	5	聞こえづらい方との対話による鑑賞を考えるワークショップ	秋田県立近代美術館
10月12日(日)	6	キンビコミュニケーター④自主企画ワークショップ	秋田県立近代美術館
10月16日(木) ～21日(火)	7	出前美術展inさくら国際高等学校秋田キャンパス	さくら国際高等学校秋田キャンパス
10月22日(水) ～24日(金)	7	出前美術展in秋田大学医学部附属病院	秋田大学医学部附属病院
10月23日(木)	7	「ミュージアム連携展『昔のくらしと道具』」ワークショップ	秋田県南部老人福祉総合エリア
10月29日(水)	1	キンビ美術部⑦	横手市交流センターY ² プラザ
11月 1日(土)	3	うちのあかりの対話ラボ	秋田県立近代美術館
11月 3日(月)	6	キンビコミュニケーター④自主企画ワークショップ	秋田県立近代美術館
11月 9日(日)	7	「みんなのMuseumプロジェクト企画まるごと〇展」クロージング座談会	秋田県立近代美術館
11月13日(木)	4	大曲支援学校と大曲農業高等学校との交流及び共同学習④	秋田県立農業科学館
11月15日(土) ・16日(日)	1	アートコンダクター中級講座	国立新美術館
11月22日(土)	1	60年前のあきた モノや写真で思い出を語り合う会	秋田県立博物館
11月22日(土) ・23日(日)	1	アートコンダクター中級講座	国立新美術館
11月26日(水)	1	キンビ美術部⑧	横手市交流センターY ² プラザ
12月14日(日)	1	CONNECT共生・多様性・アクセシビリティについて考えるトーク	京都国立近代美術館
12月23日(火)	1	認知症の方とのアート鑑賞	グループホームりんご村
12月24日(水)	1	認知症の方とのアート鑑賞	グループホーム康々園
1月21日(水)	1	認知症の方とのアート鑑賞	グループホーム康々園
1月22日(木)	1	キンビ美術部⑨「高齢の方との交流会～よってたんせあがってたんせ～①」	横手市交流センターY ² プラザ
2月 3日(火)	8	第2回みんなのMuseumプロジェクト実行委員会	秋田県立近代美術館
2月 9日(月)	1	認知症の方を含む高齢の方とのアート鑑賞	ふれ愛塾
2月17日(火)	5	ICTを活用した障がいのある方の生涯学習講座	秋田県立近代美術館
2月18日(水)	1	キンビ美術部⑩「高齢の方との交流会」準備	横手市交流センターY ² プラザ
2月19日(木)	1	キンビ美術部⑪「高齢の方との交流会～よってたんせあがってたんせ～②」	横手市交流センターY ² プラザ
3月 5日(木) ～15日(日)	6	キンビコミュニケーター展覧会	秋田県立近代美術館

「みんなのMuseumプロジェクト」
ダイジェスト



II

令和7年度の取り組み

1. 隔たりのない、誰もがつながるプログラムの企画と運営

Museumが「地域のつながり」を育み、孤独や孤立を防ぐ「社会的処方」の基盤として定着させることを目指し、以下の取り組みを組織的に展開した。

(1)「みんなのMuseum研究会」



「みんなのMuseum研究会」
アーカイブ

- 担当館** 秋田県立近代美術館
- 日時** 令和7(2025)年5月29日(木) 13:30~17:00
- 会場** 秋田大学教育文化学部3号館 1階3-150
- 参加者** 阿部淳子氏 横手市市民福祉部まるごと福祉課・課長
安藤郁子氏 秋田公立美術大学・教授 NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事
和泉浩氏 秋田大学教育文化学部・教授
黒木健氏 東北芸術工科大学・非常勤講師
澁谷和之氏 澁谷デザイン事務所
林容子氏 一般社団法人ArtsAlive・代表理事

内容 「みんなのMuseum研究会」は、アート、福祉、教育、デザイン、行政といった多分野の専門家が集まり、秋田県が抱える孤独・孤立対策や障がいのある方の生涯学習支援というプロジェクトが向き合うべき喫緊の課題の共有・検討を行った。アートが心身の健康にもたらす力を「社会的処方」として実装するため、それぞれの専門家のこれまでの実践をもとに、新たな交流の場を創出する具体的なプログラム立案を進めた。本研究会は、専門家とともにMuseumの資源を活用した持続可能な社会参画のモデルを描き出すための具体的なスキームを立案・共有する重要な機会となった。



各分野の専門家から、Museumの資源を活用した持続可能な社会参画のモデルを確立するための助言を得る

(2) 不登校など社会的に孤立しがちな子ども・若者との活動「キンビ美術部」の実施

担当館 秋田県立近代美術館

日程 各月1回程度実施

会場 横手市生涯学習館Ao-na、横手市交流センターY²プラザ、秋田県立近代美術館

参加者 横手市内適応指導教室利用生徒、横手高校定時制課程生徒、
スペース・イオ児童・生徒、横手市「こども・若者相談窓口YotteCotto」参加者など

ファシリテーター 安藤郁子氏 秋田公立美術大学・教授 NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事 (6月)
黒木健氏 東北芸術工科大学・非常勤講師 (6月、7月、8月、3月)

林容子氏 一般社団法人ArtsAlive・代表理事 (7月、1月)

藤浩志氏 秋田公立美術大学・教授 (9月)

秋田県立近代美術館・学芸主事 (10月、11月、12月、1月、2月)

内容 「キンビ美術部」の活動は令和6年度に続いて2年目となる。昨年度は、不登校などにより社会的な孤立や体験不足の状況にある小・中学生を対象に造形ワークショップなどの創作・交流活動を展開した。参加した中学生の言葉である「何を話しても大丈夫な安全な場所が欲しい」をもとに、「心理的安全性の確保」を基盤として取り組みを重ね、学校復帰などの具体的な行動変容につながった。令和7年度は、横手市市民福祉部まるごと福祉課との協働体制を強化し、引きこもり傾向のある子ども・若者へと対象を広げると共に、これまでの成果を土台に「体験」から「社会参画」へと重点を深化させ、活動を展開した。「心理的安全性の確保」を基盤に、高齢者との交流を参加者自ら企画・実践する取り組みにより、参加者の主体性の回復と自己肯定感を育む成果を得た。

〈令和7年度「キンビ美術部」における新たな施策〉

1. 福祉行政との連携

横手市市民福祉部まるごと福祉課と密接に協働することで、制度の狭間で孤立しがちな若者へアプローチし、包括的な支援体制として活動を展開することができた。今後アートやMuseumが、人々のつながりを再構築し、一人ひとりのウェルビーイングを支える「社会的処方」としての役割を果たす可能性を示した。

2. 関係構築を大切にした段階的プログラム

顔合わせやニーズ調査を事前に行い、参加者一人ひとりの興味・関心に基づいたプログラムを臨機応変に構成するために、担当者やファシリテーター（専門家）が子どもたちのいる場所へ直接出向く「アウトリーチ（出張）」形式からスタートした。

3. 「心理的安全性」から「社会参画」への深化

プログラムの前半（7月～9月）は、何を言っても安全な「心理的安全性が担保された場」での自由な見方・感じ方を尊重する対話型鑑賞や創作を通じて、参加者の感情の解放と自信の回復に注力した。後半（10月～2月）は参加者主導を促進し、高齢者との交流会「よってたんせ あがってたんせ交流会」を仲間とともに参加者が自ら企画・実践する形式とした。自分の「好きなこと」を活かし、地域の高齢者をもてなす交流活動を自ら企画・運営することで、達成感と自己肯定感を育み、社会とのつながりを回復させる一歩となった。

6月 安心して参加できる環境づくりの取組

子どもたちが安心して「キンビ美術部」に参加できるよう、事前に各教室等の担当者との顔合わせやニーズ調査を行うとともに、担当者とファシリテーターが子どもたちのいる学校や各教室に出向くアウトリーチでの交流活動を行った。

7月 「キンビ美術部募集イベント」

「キンビ美術部」参加希望者の交流イベントでは、対話による鑑賞 (Artrip) やコマ撮りアニメづくりなどを通じ、交流を楽しんだ。



「キンビ美術部」
「アニメ!」
アーカイブ

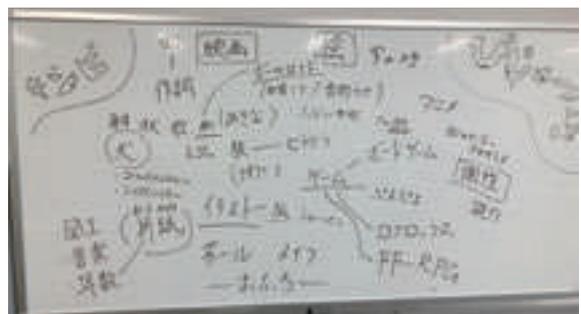


自由な見方・感じ方で楽しむ対話型鑑賞 (Artrip) とコマ撮りアニメづくり

8月 「好きなこと教えて」

参加者同士の関係構築の入り口として、また参加者が今後の活動に主体的に取り組むためのリサーチとして、互いの興味関心のあることを語り合う活動を行った。

自分の興味のあること、好きなことを紹介し合う



〈感想から〉



- 今日はみんなの“好きな○○”を知ることができてとっても楽しかったです。自分の知らない世界を知る機会がめったにないので、今日のこのような時間があればいいなと思いました。また、体験で折り紙を作ることができたのも一体感があってうれしかったです。
- 折り紙でペンギンのしおりを作るのが難しかった。他の人たちの好きなことを聞くことができておもしろかった。
- おりがみのペンギンのしおりをいっしょにつくってうれしかったです。
- いろいろな人の好きなことが知れて楽しかったです。ペンギンがかわいく作れました。
- 折り紙でペンギンを作りました。難しかったけど、かわいく作れたと思います。次のキンビ美術部も楽しみです。

9月 「藤浩志出品作品を一緒につくる」 ワークショップ参加

「みんなのMuseumプロジェクト まるごと〇展」に出品する藤氏企画の作品《めぐるいきものもり》を、藤氏とともに制作した。

《めぐるいきものもり》は、使われなくなったおもちゃなどの身の回りにある廃材を素材につくられた作品。参加者はおもちゃなどを自由に組み合わせながら制作を楽しんだ



〈感想から〉

- いろいろなおもちゃがあって、アイデアがいっぱい出てきたので終始ワクワクが止まらず、時間が足りないほどでした。
- 楽しくて時間が一瞬のように感じました。元あるものから新たなものを作り出すのが新鮮で楽しかった。
- いらなくなったおもちゃでくふうして作るのが楽しかったです。恐竜や草をイメージして作りました。おもちゃのロボットもぜひ見てください。
- おもちゃを掘り出すのがすごく楽しかったです。おもいがけないものが出てきたりして、かわいいものができました。
- 楽しかったです！作品を時間内に作れて満足です。もっとゆっくり作りたいという思いでいっぱいです(笑)。また来ます!!藤先生も優しくていい体験となりました。
- ばんやのキッチンカーをつくれてうれしかったです。
- おもちゃなどを使って作品をつくるということを考えたこともすごいと思ったし、とても楽しかったです。家でわれたおもちゃなどをさがしてつくってみます。

10月 「好きなことで高齢の方に喜んでもらおう」

自分の趣味や得意なことが、「誰か(高齢者)に喜んでもらえる」という体験ができるよう、互いの「好きなこと」を出し合う活動を行った。



イラスト、折り紙、読書、メイク、カフェなどの意見が出された

11月 高齢の方との交流会企画会議

10月に出し合った「好きなこと」を、高齢の方との交流会企画として練り上げた。直接的な会話が苦手な部員でも、「裏方(スタッフ)」として参加できるよう配慮した。

書道グループ

高齢の方の名前や好きな言葉などを書いてプレゼントしたり、一緒に文字を書いたりする。

イラストグループ

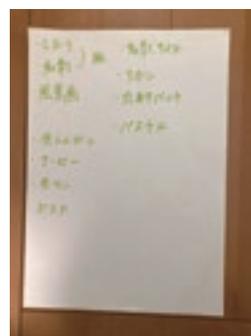
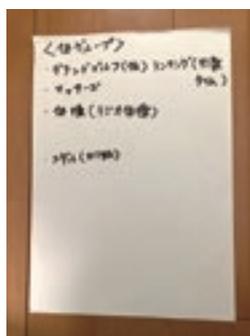
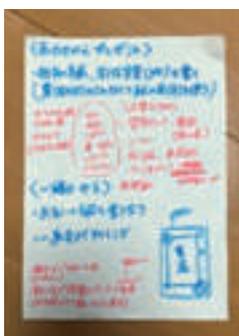
高齢の方のお名前で名刺を作ったり、イラストを描いたりしてプレゼントする。

カラダグループ

グランドゴルフやマッサージなど、体をつかって交流する。



話し合いにより具体的なイメージが固まってきた



12月 「よってたんせ あがってたんせ交流会」準備

企画した活動を実際に体験し合い、交流会の名称について意見交換を行った。交流会の名称については、地域社会への関心を高め、人間関係を広げる視点から「かまくら」に関わる名称ということをこちらから提案した。参加者からは「よってたんせ」や「あがってたんせ」の文言が出され、「よってたんせ あがってたんせ交流会」に決定した。



交流会の看板づくり

〈感想から〉

- スカットボールやマッサージなどお年寄りの方に気に入ってもらえるように頑張りたいです。
- スカットボールは楽しかったので、たぶん他の人たちも楽しめると思います。
- とても楽しかったです。名刺を作るのも、もらうのも楽しかったし、うれしかったです。初めて会う人もいたけど、なかよくできてうれしかったです。
- 今日初めての参加だったんですけど、作る側ともらう側どちらも体験できてうれしかったですし楽しかったです。

- 今日は習字をやりました。あまり上手にできなかったけど、楽しかったです。次のキンビ美術部も楽しみにしています。
- 久しぶりにキンビ美術部をやって楽しかったです。スカットボールや折り紙をやって、学校に行く前のリフレッシュになりました。次もキンビ美術部をやりたいと思いました。
- 名刺やしおりを描いてみて楽しかった。色を付けたりデザインを考えたりするのが難しかった。でも自分の中で納得のいく作品(名刺、しおり)ができて嬉しかった。

1月 事前交流会

高齢者との本交流会「よってたんせ あがってたんせ交流会」(2月実施)に向け、事前交流会を開催した。これは、不登校や引きこもり等の経験を持つ「キンビ美術部」部員にとって、面識のない高齢者との交流は心理的負担が大きいことが考えられるため、まずはアートを介して交流のハードルを下げ、本番の企画に向け意欲を高めることを目的に開催した。

当日は、一般社団法人ArtsAliveの林容子氏をファシリテーターに迎え、対話型鑑賞Artrip[※](アートルリップ)と茶話会を行った。林氏によるArtripは、部員にとっては既に7月の「募集イベント」で、高齢者にとっては昨年度からの事業で親しんでいるプログラムであるため、安心して参加できる環境にある。

Artripの作品として、交流会の名称にもなっている地元横手の行事「かまくら」を題材とした版画家・勝平得之の《かまくら》、凧揚げの様子が描かれた日本画家・福田豊四郎の《田園抄 村童12ヶ月(一月)》、そして抽象的な表現作品として洋画家・瑛九の《青の中の黄色の丸》を選定した。《かまくら》を鑑賞した際には、高齢者の方々が語る「かまくら」の思い出が、若い世代にとって新鮮に感じられたようで、世代を超えた共通の話題で盛り上がった。また、《青の中の黄色の丸》では、「ボルダリングに見える」「アドバルーンに見える」「スカーフに見える」など、自由な発想による対話が展開され、会話が苦手な子どもたちも自分のペースで参加することができた。ある子どもは、最初は「ボルダリングに見える」と話していたが、他の人の見方や感じ方に触れるうちに、「もうボルダリングに見えない!」と語り、参加者の笑いを誘うとともに作品の見方の変化を楽しんだ。



「かまくら」を題材にした作品の鑑賞



思い出の感想などで盛り上がった茶話会

このような変化は、多様な人々と共に鑑賞することで、視点が広がり、感じ方が深まることを示している。認知症の方や高齢の方にとっても、記憶に頼らず「今この瞬間」に感じたことを共有できることが、安心感につながった。

事前交流会は、年齢や立場を越えて「一緒に楽しむ仲間」としてのつながりを生み出した。キンビ美術部の子ども・若者も、高齢の方々も「来月また会えるのが楽しみ」と語り、地域における新たな多世代のつながりを育む貴重な機会となった。

※「Artrip(アートルリップ)」はニューヨーク近代美術館(MoMA)で始まった手法を基に、一般社団法人ArtsAliveが日本で開発した対話型アート鑑賞プログラム。専門の「アートコンダクター」の進行で、作品を見て感じたことを自由に語り合う。

1月 事前交流会

〈感想から〉

キンビ美術部

- 様々な年代の方とアートリップを楽しむことができ良かったです。絵についてだけでなく、過去に自分が経験したことや思い出などのエピソードも一緒に聞けて、新鮮な体験ができました。自分が経験したことのない出来事や様々な角度からの絵の見方など楽しかったです。2月の本番は参加できませんが、またこういう交流会があったらいいなと思いました。
- アートリップでいろんな絵を見たりしているいろいろな見方があって楽しかったです。
- 高齢の方と話して、今まで知らなかったことなど教えてくれて、キンビ美術部に来て良かったと思いました。こういう交流会が増えたらいいなと思いました。
- 昔のアートを見て、かまくらやたこあげは分かりやすく、瑛丸のアートは考えがいがあって楽しかったです。
- 今日は普段あまり交流しない層の方とお話をしました。とても新鮮で楽しかったです。

高齢者

- 「よってたんせ あがってたんせ」テーマは子どもたちが考えたとき、なんて温かく心の通う良いテーマだと思った。この時期の横手にふさわしいと感心しました。子どもたちの創造の豊かで夢のある感性に刺激されました。林先生の流れるような楽しい話題に脳が活性化されました。
- 今日の「よってたんせ あがってたんせ交流会」に参加できて、楽しい時間を過ごせてとても良かったです。絵画一つでも見方が違って面白かったです。全てみんな違ってみんないい、と思います。スタッフの皆さまご苦勞様でした。来月の交流会にも参加できたらと思っています。
- 素晴らしい。
- 久しぶりに若い方と雑談できて元気をもらいました。
- アート自体ふれる機会がなかったので、今回はいろいろな声が聞けて楽しく過ごせました。若い方との交流で若さをいただきました。
- 若い人たちと一緒に交流したことがとても素敵な活動でした。絵を見ているんな発想を引き出す先生が良かった。「日々是好日」今日はとても良いリフレッシュができました。

2月 「よってたんせ あがってたんせ交流会」※詳細は当館ホームページにて

高齢者との交流会本番に向け、前日には会場準備と「前日祭」を計画している。「前日祭」の設定にあたっては、YotteCottoのカウンセラーより「キンビ美術部の参加者の中には、学校祭を経験していない人も多くいる。学校祭のような、参加者自身が楽しめるような場になれば」との助言を得て、企画に反映させた。当日は、市内2カ所の高齢者施設からの参加者を予定し、書道やイラスト、スポーツなどの活動を企画している。なお、本報告書は事業実施前の発行となるため、当日の詳細等は当館ホームページをご覧ください。

(3) 多様な方とのアート鑑賞プログラム「Artrip」の実施

担当館 秋田県立近代美術館

〈第1回〉

日程 令和7(2025)年8月21日(木) 10:30~11:30

会場 秋田県立近代美術館(コレクション展)

参加者 精神障がいのある30代から60代までの6名
(横手市市民福祉部まるごと福祉課と協働で開催)

ファシリテーター 林容子氏 一般社団法人ArtsAlive・代表理事



精神に障がいのある方との鑑賞会

〈第2回〉

日程 令和7(2025)年8月21日(木) 14:30~15:30

会場 秋田県立近代美術館(コレクション展)

参加者 認知症の80代の4名(聾啞の参加者に手話通訳員を配置)
(横手市市民福祉部まるごと福祉課と協働で開催)

ファシリテーター 林容子氏 一般社団法人ArtsAlive・代表理事



認知症の方との鑑賞会(聾啞の方へ手話通訳員の配置)

〈第3回〉

日程 令和7(2025)年12月23日(火) 14:00~15:00

会場 認知症対応型共同生活介護施設グループホームりんご村

参加者 認知症の70代~80代の8名

ファシリテーター 北島珠水 秋田県立近代美術館・学芸主事



認知症対応型グループホームへのアウトリーチ

〈第4回〉

日程 令和7(2025)年12月24日(水) 15:00~16:00

会場 認知症対応型共同生活介護施設グループホーム康々園

参加者 認知症の70代~80代の7名

ファシリテーター 北島珠水 秋田県立近代美術館・学芸主事

〈第5回〉

日程 令和8(2026)年2月9日(月) 10:00~11:00

会場 ふれ愛塾

参加者 認知症を含む高齢者70代~80代の7名

ファシリテーター 北島珠水 秋田県立近代美術館・学芸主事

内容 地域生活支援センターのサービス利用者(30代~60代、統合失調症や発達障がいなど)や、認知症対応型通所施設、認知症対応型共同生活介護施設グループホームの利用者(70代~80代など)を対象に、対話型鑑賞プログラム「Artrip(アートリップ)※」を実施した。美術館の展示室内での鑑賞に加え、来館が難しい方のために、介護施設等へ出向く「アウトリーチ(出張)」形式でも行った。普段は美術館に足を運ぶことが難しい方や美術作品を鑑賞する機会が少ない方を対象とした鑑賞会であったが、参加者にとっては笑いを交えながら感じたことを自由に語り合う時間となった。認知症の方との鑑賞会の中で、絵画に描かれた山菜の調理の仕方などを認知症の方が付き添いの介護職員に教える場面があった。介護職員との関係が、日常の世話を“受ける”側から“教える”側に移る場面について、介護職員から「新鮮であった」との感想が聞かれた。また、言葉だけでは自分の思いを伝えることが難しい方でも絵画作品を媒介とすることで発語が増え、表情が明るくなったなどの変化も報告された。「何を言っても否定されない」という心理的安全性が確保された場で笑いを交えて語り合うことで、精神的な開放感を得る時間となった。また、普段美術館を訪れることが難しい層に鑑賞機会を提供し、アートを介して地域や社会とのつながりを再構築する「社会的処方」としての可能性も示された。

※「Artrip(アートリップ)」はニューヨーク近代美術館(MoMA)で始まった手法を基に、一般社団法人ArtsAliveが日本で開発した対話型アート鑑賞プログラム。専門の「アートコンダクター」の進行で、作品を見て感じたことを自由に語り合う。

「Artrip」の実施

〈感想から〉



介護士

- 普段より真剣に話を聞く様子がありました。いい刺激になったと思います。アートが心の栄養となり、癒しになったと思います。
- 林先生の進行により、リラックスして参加していたようです。ありがとうございました。
- 1名の方が集中力が切れている様子でした。しかしながら疲労を引き起こさず経過しました。
- 美術館への敷居が低くなったような気がします。いい機会をありがとうございました。

参加者

- 会話がよかった。普段見られない物が見れてよかった。またやりたい。
- おもしろかった(おもしろかった)。
- 絵の持つ深さを体験できたと思います。絵を深く学びたいと思いました。これを機会に美術館に行きたいと思いました。
- いろいろな考え方をみんなとして、とても楽しかった。みんなと考えることによってあらたな発見ができたことが楽しかった。
- ひとつひとつの絵について、様々な意見を出し合えて参考になりました。先生のご意見も素晴らしく感動しました。素晴らしい絵などをもっとよく見に来たいと思いました。
- みんなと鑑賞できてよかったです。たくさんの人と鑑賞できて楽しかったです。

(4) 博物館教室「60年前の秋田 モノや写真で思い出を語り合う会」の実施

- 担当館** 秋田県立博物館
- 日程** 令和7(2025)年10月4日(土)、11月22日(土) 13:30~15:00
- 会場** 秋田県立博物館
- 参加者** 4名(10月4日)、6名(11月22日)
- 講師** 浅野朝秋氏 秋田大学・准教授

内容 秋田県立博物館では、6年前から博物館教室として「60年前の秋田 モノや写真で思い出を語り合う会」を実施している。博物館所蔵の民具や60年前当時の写真スライドを活用し、地域回想法の手法を使った対話型の鑑賞会であり、今年度は30代から80代と幅広い年代の方に参加いただいた。講師も含め全員が秋田県出身ということで、「ぼだっこ(塩辛い塩鮭)」やハタハタなどの食文化などの話題をもとに懐かしんだり、世代の格差に驚いたりと終始和やかな雰囲気であった。一般的に回想法は、認知症へのアプローチとして知られているが、地域における多世代間交流の手法として、また参加者同士のつながりや地域をより活性化する手法としても非常に機能するものと感じた。この取り組みは、秋田の風俗を撮影した写真作品や版画作品でも同様の効果が期待できると考えられる。今後、秋田県立近代美術館、秋田県立博物館、秋田県立農業科学館、秋田県立美術館の4館が連携し、それぞれの所蔵資料を持ち寄ることで、より豊かな回想法プログラムの構築が期待される。



地域回想法について語る浅野氏



参加者同士、かつての記憶に想いを馳せる

2. 地域の課題と魅力の発掘ワークショップ

「地域の課題と魅力の発掘ワークショップ」は、Museumとアーティストが協働し、文化的なコミュニティづくりを推進することを目的としている。参加者は、身近な廃材や版画文化などをテーマとした制作活動に取り組み、現代社会が抱える課題を自分ごととして捉え直すとともに、改めて地域の文化的な魅力を再発見する機会となった。

(1)「藤浩志出品作品を一緒に作る」ワークショップ



《めぐるいきものもり》
ワークショップ
アーカイブ

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年9月5日(木)～9月9日(火) 10:00～12:00、13:30～16:00

会場 秋田県立近代美術館

参加者 小学生から70代までの168名

講師 藤浩志氏 秋田公立美術大学・教授

内容 美術家・藤浩志氏の「みんなのMuseumプロジェクト企画 まるごと展」出展作品である《めぐるいきものもり》を藤氏と一緒に制作するワークショップを開催した。本作は、使われなくなったおもちゃや木片など、身の回りにある廃材を素材とし、企画展のテーマである「〇」が持つ「つながり」や「循環」というイメージを、廃材の再利用という形で具現化した作品である。5日間のワークショップを通じて、小学生から70代までの168名の参加者が、藤氏とともに制作した。アーティストと直接関わりながら制作することを通じて、身近な素材が「どこから来て、どこへ行くのか」という「循環」への視点を共有し、環境問題や消費社会のあり方を「自分ごと」として考える機会となった。同時に、不登校などの背景をもつ「キンビ美術部」の若者たちも参加した本ワークショップにより、Museumがひとりひとりの表現を肯定する「心理的安全性の高い場」となり、アートを介して人々の心に繋がりが生まれる場となる可能性を示す貴重な機会となった。



身近な物の「循環」や「表現すること」について



藤氏と一緒に作品について語る



工具を使って自由に制作



参加者との記念撮影



参加者との記念撮影

〈参加者の感想から〉



- 今日、このような体験をさせていただいて、すごく、「表現」について考えることになった。先生の言っていた、「100人いれば100通りの考え方がある」という発言が個人的に心に残っています。そしてなにか自分の中で、グッときた物や見たものを作品にするってすごいことだなあと思いました。作品としてだけでなく、文やイラスト、音、動きなどたくさんのが作品になって人々の個々の頭に残り続けるのはすごい意味のあることだと思います。私も誰かの心に残る意味のあることをしていきたいです。
- 僕は藤浩志さんがプラスチックのおもちゃで作った恐竜を初めて見た時とてもびっくりしました。一つ一つのおもちゃから小さい恐竜や大きい恐竜ができるし、環境にも優しい取り組みだと思いました。藤浩志さんの美術についてのお話を聞いて、僕は美術とはその人にしか分からない美しさなのかなと感じました。これからの美術の時間も今日学んだことを生かしたいです。
- 最初作品を見たときカラフルな恐竜がいて「かっこいい!!」と思いました。けれど作品を近くで見るとたくさんのおもちゃがつかわれていて、かっこいいだけではなくすごいんだな!と思いました。一緒に作品を作ってみて、大変だけど、作品作りはとっても楽しいんだなと思いました。
- 藤さんの作る空間に私たちの想像力が入っていることがすごくうれしいです!!

- 自分とは違う美術について知ることができました。一人一人がいろんな感情や想像をもって作る作品はすばらしいし、新しい考え方も、持てるようになりました。ぼくも、藤さんのように、美しいと思ったことがあります。それを、自分の表現で、絵や作品にして作ってみたいと思いました。
- 芸術は作って見て楽しむことだけかと思っていましたが、思いや感情を作品から感じることができました。人によって五感の感じ方などが違うんだと気づくことができました。考えや気持ちを形にすることで、見た人からの共感や新たな考え方を、作る人も見る人も互いに感じることが出来るのだと気付きました。
- 藤浩志さんの活動に参加させてもらい、あんなにワクワクしたのは久しぶりだと思いました。私は今まで、「美術」を自分の考えやひらめきを表現する方法の1つと考えていました。ですがそれだけではなく作品から新たな自分の考えが生まれたり、忘れていた楽しさを思い出させてくれたり、美術を習う理由がまた分かった気がしました。
- 作る側になってみて、その時の気持ち、感情を言語化できなくても、作品に込めるだけで、作品が形になってくれるのだと思いました。海を越えて、言語が通じない違う国籍の人でも、作品があることで互いに分かりあっていたり、平和を築けたりする、そんなきっかけになるのかなと思いました。



(2) 版画家 伊藤由美子氏による「勝平得之と私」語りと版画のワークショップ

- 担当館** 秋田県立近代美術館
- 日時** 令和7(2025)年9月20日(土) 13:30~16:00
- 会場** 秋田県立近代美術館
- 参加者** 一般5名
- 講師** 伊藤由美子氏(いとう版画工房)



伊藤由美子氏ワークショップ
アーカイブ

内容 本ワークショップは、秋田を代表する創作木版画家・勝平得之のひ孫である伊藤由美子氏を講師に迎え、「語り」と「実践(版木を彫る・摺る)」の構成で実施した。得之が作品に込めた「秋田を遺す」という切実な願いや、その精神を受け継ぐ伊藤氏の思いを共有したことは、参加者が地域の文化遺産について改めて捉え直す貴重な機会となった。伊藤氏から語られた作品の背景にある物語への理解に加え、自ら手を動かす制作体験を通じ、参加者は版画表現の奥深さと、作品が生まれる感動を味わった。



勝平得之の作品や、自身の作品について語る



3. 多様性と包摂性の高いコミュニティづくりを担う Museumを目指した取り組み

Museumが、地域社会の「つながり」を日常的に支える基盤となることを目指し、Museumと地域の福祉施設や障がい者団体等が連携し、地域に暮らす人やこれからの共生社会を担う若者などが多様な表現・価値観に出会い、交流する場を創出した。

(1) 秋田県難聴者・中途失聴者協会との合同研修会

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年7月12日(土) 10:00~12:00

会場 秋田県立近代美術館

参加者 秋田県難聴者・中途失聴者協会会員7名、要約筆記者4名、一般3名

内容 「美術館を含む博物館施設に望むこと」をテーマとしたワークショップ及び当館で開催している特別展「かがくいひろしの世界展」の鑑賞を行った。ワークショップは、本展で導入されている手話や文字情報による作品解説動画「ポケット学芸員」のアプリの体験も含め、聴覚障がい者がより楽しめる鑑賞空間について意見交換を行った。参加者からは、一口に聴覚障がいといっても必要なサポートが異なるため、どんな支援が必要かについて気軽に相談できる場や、聞こえる人と聞こえない人が一緒に楽しめる鑑賞の場が欲しいなどの意見が寄せられた。今後のユニバーサルな鑑賞空間実現に向けての貴重な機会となった。



「美術館を含む博物館施設に望むこと」をテーマとした研修会



話した内容を要約筆記でスクリーンに表示



聴覚に障がいのある方がより楽しめる鑑賞空間について意見交換



ポケット学芸員のアプリの活用

合同研修会

〈アンケートより〉



- 美術館に足を運べない高齢者、認知症、障がいのある人、不登校の子どもなどにアートを届けるとはどういうこと?と興味津々で参加しました。このようなプロジェクトがあることを全く知りませんでした。ポケット学芸員のアプリがどの美術館でも使えるといい。
- 障がいのあるなしに関係なく楽しめるアートや人とのつながりで元気になるアート、アートを通して笑顔になるって素敵だと思いました。体験できる絵とかあれば障がいに関係なく楽しめると思います。ポケット学芸員のアプリは手話が見やすくてよかった。

- 耳が聞こえにくいので相談できるといい。(ポケット学芸員のアプリ)手話はやったことがないので、少ししか分らなかった。
- 「みんなのMuseumプロジェクト」は聞こえない人たちの意見を取り入れようとしてくれていることが分かった。プロジェクトについて知らない人がほとんどだと思うので、もっともっと周知して、いろいろな人が出会うきっかけ作りをしてほしい。
- アートは年齢に関係なく、自然にコミュニケーションができる。とても心を和ませてくれる。いろいろな人が地域のイベントと一緒に参加できていたらもっと身近に感じられるかもと思いました。

(2) うちのあかりの対話ラボ

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年11月1日(土) 13:30~15:00

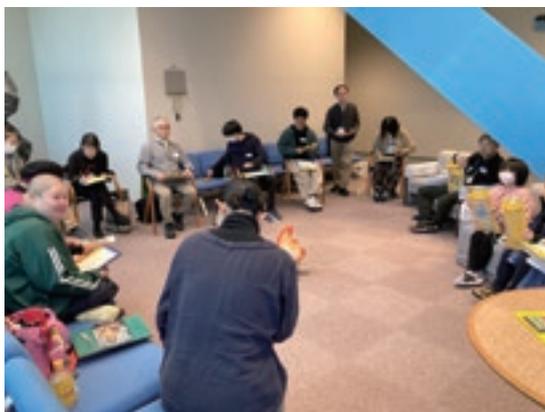
会場 秋田県立近代美術館

参加者 小学生から70代までの18名

ファシリテーター 安藤郁子氏 NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事

内容

「うちのあかりの対話ラボ」は、障がい者の生涯学習を支援する「NPO法人アートリンクうちのあかり」代表理事の安藤郁子氏のファシリテーションのもと、誰もが安心して対話できる場について考えることをねらいとした取り組みである。発達障がいや引きこもりなどの当事者を含め、小学2年生から70代までの多様な人が参加した本プログラムにおいて、誰もが安心して話すことができるよう、対話にルールや創作活動を導入し、「自分について語る」ことへのハードルを下げた。「日常生活では自分の声を出すことが難しい」と語っていた人が表現活動や対話を介して他者と交流するきっかけを提供できたことに取り組みの意義を感じた。本取り組みをMuseumとして持続的に取り組むためには、単なる“おしゃべりの場”ではなく、「語り」を通じて自分自身の内面と向き合い、他者と共有するというプロセスを大切にすること、そして、一過性のイベントや“身内”の交流に留まることなく、地域に開かれた活動として継続的に実施していく体制構築の必要性を感じた。



小学2年生から70代までの幅広い年代の方18名が参加

うちのあかりの対話ラボ 〈アンケートより〉

- みんなと話したから、よかった。いろいろな人と話して「こういうこともするんだな」とおもいました。みんながけんかせず、なかよくすればいいとおもいました。(7才)
- みんなと話してたのしかった。話したことで、自分がたくさんしゃべれるとは思いませんでした。(9才)
- 聞いたこと、聞いてもらったこと、全ての体験にあたたかさがありました。いろいろな方の体験、生き方に触れて勇気ももらえた。(10代)
- 様々な年代の人と話せて満足だった。このワークショップで、秋田県内の地域による格差を感じた(10代)
- 少し緊張したが、いい時間だった。初めて会う人と居場所について語り合えて有意義だった。(20代)
- うちのあかりの名前が大好き。いろいろな人とつながってみたいです。(30代)
- いろいろな年齢の人が集まって話をすることは素敵だなと思いました。(40代)
- 自分の考えが最後まで言えたような気がする。一人ずつの考えが良く伝わったと思う。このワークショップを通して落ち着いて人の話を聞くことができた気がする。(60代)
- いろいろな声があり、じっくり聞くとその背景も分かってきて、なるほどなぁと感じた。(60代)
- 障がい者に対する地域格差についていろいろ伺えた。(60代)
- 自分を受け入れてもらうには、こちらも一生懸命やることが大事だと思った。そう簡単に心地よい居場所はできなくても、誰かの居場所を考えてあげられる人になりたいです。(70代)



4. 博物館施設における共生社会の担い手を育む交流及び共同学習

博物館施設における交流及び共同学習は、障がいのある幼児児童生徒と障がいのない幼児児童生徒、あるいは地域の障がいのある人がMuseumの資源を介して触れ合い、共に学び合う活動を目指している。異なる背景を持つ人々が活動を共にすることで、互いの多様な在り方を理解し、尊重し合う大切さを直接体験として学ぶ機会となり、単なる知識の習得ではなく、共同制作や体験活動等を通じて経験を深め、社会性や豊かな人間性を養う大きな意義を有している。

(1) 秋田県立横手支援学校と秋田県立増田高等学校、十文字和紙愛好会による交流及び共同学習

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年7月 7日(月)9:50~10:40 オンライン交流
会場 // 7月17日(木)9:50~10:40 秋田県立増田高等学校
// 9月 4日(木)9:50~10:40 秋田県立近代美術館



交流及び共同学習
アーカイブ

参加者 秋田県立横手支援学校14名、秋田県立増田高等学校9名、十文字和紙愛好会2名

内容 両校の地元、横手市十文字で200年以上前から大切に守り継がれてきた十文字和紙を使い、生徒たちが協力して直径200cm、150cm、120cm、100cm、80cmの大玉を制作した。交流当初は緊張している様子が見られた生徒たちであったが、大玉に十文字和紙を貼る活動を通して次第に打ち解け、笑顔で制作に取り組んだ。3回目の交流では、交流で感じたことや相手へのメッセージを大玉に書く活動を行い、これまでの活動を振り返った。本作は「みんなのMuseumプロジェクト企画 まるごと〇展」でも展示され、見る人に、人々の多様な在り方の理解や尊重し合うことの大切さを感じさせる契機となった。



十文字和紙の質感を味わいながら、協力して大玉に十文字和紙を貼る交流



完成した大玉に互いにメッセージを書く

(2) 秋田県立大曲支援学校と秋田県立大曲農業高等学校による交流及び共同学習

担当館 秋田県立農業科学館

日時 令和7(2025)年 7月 9日(水) リンゴの袋かけ(秋田県立大曲農業高等学校生徒)
会場 // 7月15日(火) リンゴに貼るシールデザイン(秋田県立大曲支援学校児童)
// 9月10日(水) 袋はずしとシール貼り(秋田県立大曲農業高等学校生徒)
// 11月13日(木) 障がい理解講座(秋田県立大曲農業高等学校生徒受講)
// 11月13日(木) リンゴの収穫(秋田県立大曲農業高等学校生徒と秋田県立大曲支援学校児童の交流)

参加者 秋田県立大曲支援学校22名、秋田県立大曲農業高等学校9名

内容 秋田県立大曲支援学校小学部児童と秋田県立大曲農業高等学校生徒がリンゴ栽培を通じた交流活動を行った。児童は定期的に栽培へ関わることで「食」への関心を高め、高校生は授業で学んだ知識や技術を生かす機会となった。また、収穫までの継続的な交流を通して、お互いを尊重し合う大切さを学ぶ機会となった。



大曲支援学校の児童がデザインしたシールを貼ってリンゴに模様をつける



大曲支援学校の職員による障がい理解講座
大曲農業高等学校の生徒が受講



リンゴの収穫体験を通じた交流

農業高校の生徒が支援学校の児童の収穫をサポートする場面では、高校生側には「学んだ技術を活かして役に立った」という自己有用感が生まれ、児童側には「交流を楽しみながら達成感を得る」という成果が得られた。美術などものづくりを通じた交流では、言葉によるコミュニケーションが難しい場合でも、「こうしたい」という思いが色や形に現れ、自然に共有されるという「人と人をつなぐ力」が発揮される。さらに、今回の交流のように伝統工芸(十文字和紙)や農業(リンゴ栽培)などといった地域の資源、伝統文化を活用することで、活動を通じてふるさとへの興味・関心、愛着心を共に育むことができる。Museumは、学校種や学齢、障がいの有無を超えた連携をコーディネートする中核となり、多様性と包摂性の高いコミュニティづくりの拠点となる可能性とともに、学校卒業後の「障害者の生涯学習」の場へとスムーズにつながるための重要な接点でもあることを改めて感じた取り組みとなった。

5. 鑑賞支援ツールやメタバースなどの活用などによる ユニバーサルな鑑賞プログラムの構築

本取り組みは、障がいのある方へのアクセシビリティの向上と、アートによる「出会いの場」の創出を目的としている。鑑賞支援ツールは視覚による鑑賞を支援するためだけでなく、異なる視点を持つ人々が互いの視点を共有し、共に対話を深めるためのツールである。本取り組みでは、「どうすれば多様な人が共に楽しめるか」を大切にしてきた。障がいの有無に関わらず、他者の視点に触れることで個々の「見る力」を養い、誰もがアートを楽しみ、アートを通じてつながりをつくる取り組みへの展開を目指している。

(1)「聞こえづらい方との対話による鑑賞を考えるワークショップ」

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年10月11日(土) 13:30~15:00

会場 秋田県立近代美術館

参加者 聴覚に障がいのある方3名、要約筆記者1名、一般1名

内容 聴覚に障がいのある方へのアクセシビリティ向上の取り組みとしては、令和5年度にジェスチャーによる無音声の鑑賞会を実施した経緯がある。しかしながらジェスチャーでは、自分の感情を伝えるにはハードルが高いという課題が残り、今回、聞こえづらい方との対話型鑑賞実現のための「筆談鑑賞会」を試行し、意見交換を行った。「筆談鑑賞会」は、聞こえる・聞こえないに関わらず、ともに文字や絵を「かく」ことで、作品についての発見や疑問を共有し対話を深めていくプログラムである。聴覚に障がいのある方へのサポートとして、話す内容を記述した文字資料、話の内容を要約し、書き起こす要約筆記者、UDトークアプリを活用して音声を文字化し、モニターに投影したものを準備した。参加者からは、「文字に残すことで感想を振り返ることができた」「筆談なら同時に表現でき、意見のつながりも見えやすい」といった好意的な声が寄せられた。また、難聴など外見からは分かりにくい「見えない障がい」について、「日常生活では理解されにくく、悲しい思いをすることもある。このような機会を通じて理解が広がると嬉しい」といった切実な声もあった。作品への理解を深めるだけでなく、互いの存在や背景への理解を育む機会となるよう、開かれた対話の場を目指していきたい。

〈筆談鑑賞会の流れと成果・今後に向けて〉

●筆談鑑賞会の流れ

①絵をじっくり見る。

②絵について感じたこと、考えたこと、聞いてみたいことをかく。

※声では話さない(笑い声はOK) ※同時に書いてOK

※他の人に続けて書いてOK ※絵やイラスト、何でもOK

③グループごと感想共有

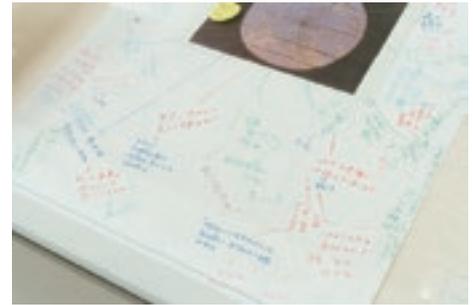
④他のグループの筆談を鑑賞

⑤感想の共有

●成果・今後に向けて

(1)「筆談」によるコミュニケーションの障壁の解消

- ・音声による会話では「話す順番」を待つ必要があるが、筆談では参加者が順番を待つことなく同時に自分の感じたことを書き込むことが可能になる。
- ・聞こえる人と聞こえない人が同じルール(書くこと)で参加することで、同じ立場で対話を楽しめる場となる。



(2)感じ方、考え方の「可視化」と「蓄積」

- ・音声による対話はその場で消えるが、文字として記述することで紙上に残り、後から振り返ることができる。
- ・矢印(→)などを用いて他者の意見に反応を重ねることで、個々の意見がどのように結びついているかを視覚的に把握でき、深い作品理解につながる。

(3)「見えない障がい」への理解

- ・難聴などの聞こえづらさは外見から判断しにくく、日常生活で理解を得られず「悲しい思い」をすることも少なくないとのエピソードが語られた。多様な人が共に鑑賞することを可能にする「筆談鑑賞会」は、作品への理解を深めると同時に、「外見では分かりにくい障がい」を持つ方々の存在や困難について社会的な理解を広める貴重な機会となる。



感想を書き合う

要約筆者と音声文字化UDトークアプリをモニターに投影

筆談鑑賞会

〈アンケートより〉



- ワークショップは楽しかった。みんなで書いてみたらいろんなイメージを考えていたので面白かった。聞こえないので意味が分からないのが多いなか、今日は字を見ながらだったので分かりやすかった。(60代)
- いろいろな人の思ったことや感じ方、それぞれだと分かって楽しかった。すごく楽しくおもしろかったので、これからも続いて欲しいです。(20代)

- いろいろな意見が聞けて大変よかった。自分以外の考え方とか知ることができてよかったです。(50代)
- UDトーク、文字での資料、とてもよかった。要約筆記の必要性を改めて感じた。いろいろな人と交流できるこのようなワークショップを今後も期待する。(60代)
- 筆談鑑賞会は多角的な視点を得ることができ、深い洞察ができる方法だと思いました。教育現場でも取り入れていきたいです。(40代)

〈秋田県難聴者・中途失聴者協会 会報誌に感想を寄稿いただきました〉

始めに聞こえづらい人と聞こえる人が一緒に作品を鑑賞会して、そのあと10分間サイレントを設けて、作品をみて感じた印象や浮かんだ疑問などを模造紙に筆談や絵を描くなど意見交換をしました。人それぞれの見方を知ることで新たな発見もあり、こんな楽しみ方もあ



って良いと改めて思いました。職員の方々、情報保障*を担当してくれた方、ありがとうございました。若い男女が向き合っているのと小屋の中にお爺さんが布団に寝ていてお婆さんが隣で看病している感じの絵。小屋の上には天女が輪っかを持って飛んでいる姿。小屋の端には小さい天使。

言葉で説明するとこんな感じですが、10分のサイレント制限時間内に、男女がくつき過ぎているとか、天使は2人を妬んでいるとか、輪っかがドーナツに見えるとか、思い思いに書いてもらい、それに対して他の人がどう思っているのか?などの意見や情報を出し合いました。

もう一つは丸の中に線が4本あって真中にボルトが打ってある抽象画でしたが、これはなかなか難しい感じでしたが、色々な発言がありました。

絵の見方は、人それぞれで感じ方も違うので面白かったです。

※情報保障…

誰が必要な情報に平等にアクセスし、理解できるようにするための支援や環境整備のこと

一般参加者1名と要約筆記者1名も含め5名の参加でしたが、自己紹介から始まり、緊張がちょっとほぐれてきたところで、近代美術館の職員からの説明を聞きながら、じっくり2つの絵を見て、無言(サイレント状態)で思ったことや考え方とかを模造紙にたくさん書きました。説明とかは近代美術館の方から、UDトークのアプリとノートテイクで活用しながら聞けたので、とても分かりやすかったです!

2つの絵のうち、片方はシンプルな絵であり、感じたことをどう表したら良いのか言葉にするところが難しかったです。でも、他のみんなの考え方や感じ方が、それぞれあって、ひとりでは気付けなかったことを出し合ってくれたことで、その絵に結びつくような言葉が出てきて面白かったです!

やはりたくさん絵がある中で、シンプルな絵はみんなとないと意見や案や感想を出せないのだな〜って改めて感じたワークショップでした!

これからも、今回みたいな企画を増やしていけたら、聞こえない人だけでなく聞こえる人ももっと楽しんでもらえるのだろうと思いました。またUDトークの活用もこれから広まってほしいな〜と思いました。



(2)「人面付環状注口土器」レプリカの作成

担当館 秋田県立博物館

内容 秋田県立博物館は、秋田県産業技術センターと協働し、重要文化財「人面付環状注口土器」のレプリカを制作している。このレプリカは分割可能で、表面だけでなく、開口部からは指が届かないような器の内面にも直接触れることができるため、内部構造を把握できるのが特徴である。また、実際に「注ぐ」という行為も体験できるため、縄文時代の祭祀や人々の生活の様子などについて考えることが可能になる。12月18日、「一般社団法人秋田県視覚障害者福祉協会」副会長で全盲の高橋順子氏と博物館職員が、本レプリカや石斧、復元された竪穴式住居を含む館内の鑑賞プログラムについて検討した。当事者の視点を取り入れることでより充実したプログラムの実現が期待される。同時に本レプリカを活用したこの取り組みは、不登校や引きこもりなどの背景を持つ若者たちにとっての、学びとの新たな出会いとなることも期待される。視覚に障がいのある方へのアクセシビリティの向上だけでなく、多様な視点から歴史を再発見するユニバーサルな学習支援モデルとして期待できる。



重要文化財「人面付環状注口土器」のレプリカ
分割可能なため内部の構造や制作時に縄文人が器の
表面をなでて整えた様子も確認できる



実際に液体を注ぐ体験。どんな作り方、使い方をしたのか想像が膨らむ



竪穴式住居など広い空間の距離感や構造などを理解するためには模型が有効

(3) メタバースを活用した鑑賞

担当館 秋田県立近代美術館

内容 秋田県立近代美術館は、インターネットの仮想空間に美術館が所蔵する秋田ゆかりの作品を高精度に再現する、仮想近代美術館「メタバース×キンビ」の運用を令和6年4月より開始している。令和7年度は「あきた県庁出前講座」などイベントや研修を含め5,751件のアクセスがあった。令和7年10月に秋田大学医学部附属病院で開催した「出前美術展」では、病気療養中などの理由で美術館へ行くことが困難な方々にメタバースを使ってアートを楽しんでもらった。今後も医療現場など新たなフィールドでの展開を推進したい。



(4) 障がいのある方の生涯学習講座の実施 ※詳細は当館ホームページにて

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和8(2026)年2月17日(火) 13:30~14:30

会場 オンライン実施

内容 「秋田障害者の生涯学習推進コンソーシアム」と連携し、ICTを活用した障がいのある方の生涯学習講座を実施する。オンライン会議システムを用いて、美術館と自宅・福祉施設をつなぎ、外出が難しい人でもリアルタイムで作品鑑賞や制作に参加できる環境を提供する。参加者同士がオンラインで交流しながら鑑賞や制作に取り組むことで、社会参加の機会を広げる目的である。本報告書が事業実施前の発行となるため、当日の詳細等は当館ホームページをご覧ください。

6. 人と地域をMuseumでつなぐ取り組み

プロジェクトでは、令和5年度から秋田県立近代美術館を拠点に、人と地域をつなぐキンビコミュニケーターの育成に取り組んできた。研修を重ねた3年目の令和7年度は、キンビコミュニケーターがプロジェクトに参画すると共に、自主企画によるワークショップを開催し、主体的な活動へと発展した。

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年7月から11月まで9回実施

会場 秋田県立近代美術館等

内容 プロジェクトでは、昨年度の課題を踏まえ、対話型鑑賞のファシリテーションスキル向上を目的とした研修会を実施した。この取り組みを経て、キンビコミュニケーターは「キンビ美術部」や多様な方とのアート鑑賞会へ参画するとともに、自主企画ワークショップを実施するなど、主体的な活動の広がりを見せた。課題は、今後の継続的な活動を支える研修体制の整備や、日常的に活動できる場・連絡手段の確保など、活動を維持するための支援体制の構築である。加えて、県内博物館施設との連携を深め、活動の場とネットワークを拡大するための具体的な仕組みづくりについて検討を進める必要がある。



令和6年度の課題を基に開催した対話型鑑賞の研修会
(講師:黒木健氏 東北芸術工科大学)



美術館の魅力を再発見した自主企画ワークショップ「彫刻散歩」



幅広い年齢層の方に楽しんでもらった自主企画ワークショップ「カフェ7階」

自主企画ワークショップ「カフェ7階」 〈参加者アンケートより〉

- 何回か美術館に来ていましたが、今回初めてワークショップに来てみました。子どもたちはとても楽しそうに来て良かったなと思っています。
- ゆっくり過ごせてよかった。「まるごと〇展」は、触れる、体験できるところが良かった。
- いろんな種類の飲み物があってありがたかった。息子と一緒に制作できて楽しかった。興味を持っていたので家でもやってみたい。
- 7階の景色のよいところでコーヒーを飲んで最高でした。今日カフェがあるとは知らず、ラッキーでした。子どもは工作が好きなので、楽しく参加できました。いろいろ体験できてありがたかったです。

- もっと多くのイベントの企画があるとよい。
- 5階、6階の展示をゆっくり観たのでちょうど一息つきたいタイミングでした。ごちそうさまでした。大人二人での来館でしたが、子どもたちが熱心に取り組んでいるのを見て、子どもの興味のあるものが用意されているのはいい機会だと思いました。



7. プロジェクト企画展：誰もがMuseumを楽しみ、Museumを通じて出会い、学び合い、つながる場の創出

プロジェクト企画展では、多様なものの見方や捉え方を促し、作品の背景への思索を深められる展示空間を構成するとともに、体験・参加型の展示やワークショップを通じて、誰もが安心して表現し、対話できる場の創出を目指した展覧会を開催した。

(1) 秋田県立博物館施設による「ミュージアム連携出張展『昔のくらしと道具』」

- 担当館** 秋田県立農業科学館
- 日時** 令和7(2025)年10月10日(金)～10月31日(金)
- 会場** 秋田県南部老人福祉総合エリア



ミュージアム連携出張展
『昔のくらしと道具』
アーカイブ

【ワークショップ】

- 日時** 令和7(2025)年10月23日(木) 10:00～12:00
- 講師** 丸谷仁美 秋田県立博物館 主任学芸専門員(兼) チームリーダー
木村雅洋 秋田県近代美術館 主任学芸主事(兼) チームリーダー
中村美也子 秋田県立農業科学館 学芸主事(兼) チームリーダー
小泉俊貴 秋田県立美術館 学芸員



ミュージアム連携出張展
ワークショップ
アーカイブ

- 内容** 「ミュージアム連携出張展『昔のくらしと道具』」は、秋田県立の博物館施設4館が協力し、来館が難しい福祉施設の利用者に向けて行われたアウトリーチ型展示である。昭和30～40年代の農村風景写真や民具を、車椅子の高さに合わせた展示台や体験コーナーで紹介し、鑑賞者は実物に触れながら昔の暮らしを感じ取った。各館の担当者との対話型ワークショップでは交流が生まれ、蓄音機の音をきっかけに思い出を語る姿も見られるなど、地域回想法の効果も示された意義深い取り組みとなった。



展示台は、車椅子を利用する方の目線の高さに合わせ作成



ワークショップでは、実物の作品を前に、参加者と共に当時の生活について語る



県立博物館の学芸員と一緒に実際に蓄音機の演奏を聴く



黒電話や蕨ぐつなどの体験コーナー



当時の生活の様子が表されている勝平得之の版画(パネル)の展示

(2)「出前美術展inさくら国際高等学校秋田キャンパス」

担当館

秋田県立近代美術館

日時

令和7(2025)年10月16日(木)～10月21日(火)

会場

さくら国際高等学校秋田キャンパス

内容

本年4月に秋田市中心市街地に移転した通信制高校の生徒たちと地域の方々が交流しながらアートを楽しむことを目的に、同校の文化祭に合わせて開催した。彫刻作品など手で触れることができる作品や、同校の生徒の作品も併せて展示した。6日間で160人が来場し、アートを介した対話や交流が生まれる展示となった。



地域の人や保護者などたくさんの方がアートを介して関わり合い、交流が生まれた

(3)「出前美術展in秋田大学医学部附属病院」

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年10月22日(水)～10月24日(金)

会場 秋田大学医学部附属病院



「出前美術展in秋田大学医学部附属病院」
アーカイブ

【おしゃべり鑑賞会】

①近代美術館学芸主事(会期中3回)

日時 令和7(2025)年10月22日(水) 13:30～14:00 (13:00～16:00 メタバーズの体験)

// 10月23日(木) 10:00～10:30、13:30～14:00

②一般社団法人ArtsAlive代表理事・林容子氏によるアトリップ(対話型観賞)

日時 令和7(2025)年10月24日(金) 10:00～11:00、14:00～15:00

内容

病気療養等の事情により美術館への来館が困難な方々を対象に、秋田大学医学部附属病院にて「出前美術展」を開催した。彫刻など手で触れることができる作品展示や「おしゃべり鑑賞会」を通じ、見る、聞く、触る、話すなど様々な感覚を活かした多様な鑑賞体験を提供した。「外出もままならない中で、美術館が来てくれる事で、病気の子どもはもちろん大人もリフレッシュできる」等の感想をいただき、特に小児科の子どもたちにとって新たな学びと交流の機会とともに心身のリフレッシュをもたらすひとときとなった。3日間で263名が来場し、病院スタッフからも「患者と医療者が立場を超えて交流できる場として有効であった」と評価されるなど、アートが新たなコミュニケーションを生む成果を上げた。



林容子氏によるArtrip



外来患者や入院患者、お見舞いの方、医療従事者など
様々な方から鑑賞いただいた



小児病棟に入院中の子どもが鑑賞の後に描いてくれた絵

(4)「みんなのMuseumプロジェクト企画 まるごと〇展」



「まるごと〇展」
アーカイブ

担当館 秋田県立近代美術館

日時 令和7(2025)年9月13日(土)～11月9日(日)

会場 秋田県立近代美術館 5階展示室

内容 本展は多様なイメージが広がる「〇」をテーマに、秋田県立の博物館施設4館が所蔵する多様な資料に加え、障がいのある方の作品や現代作家の作品を展示し、時代や分野を超えた秋田の文化を体感できる内容の展覧会である。来場者が作品に触れたり、絵を描いたり、車椅子で鑑賞したりする体験型展示を通じて、作品の背景や他者の視点に触れ、多様なものの見方への理解を深められる構成とした。多様な人々が出会い、表現の豊かさを共有するインクルーシブなワークショップも多数開催した。

観覧料 一般 500円、大学生以下無料(本展の半券提示で会期中は何度でも入場可能)
※11月3日(月)文化の日は無料公開 ※障害者手帳、またはミライロIDご提示の方は無料(介添1名無料)

主催 「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会 (事務局 秋田県立近代美術館)

企画・トータルディレクション 澁谷 和之氏(澁谷デザイン事務所)

【オープニングイベント】

日時 令和7(2025)年9月13日(土) 13:30～16:00

内容 おしゃべり鑑賞会(アーティストトーク)
Sound Bath～音楽のおふる～(サウンド:sataRo、DJ SHINTARO、Doctor Kano)



「まるごと〇展」
オープニングイベント
アーカイブ



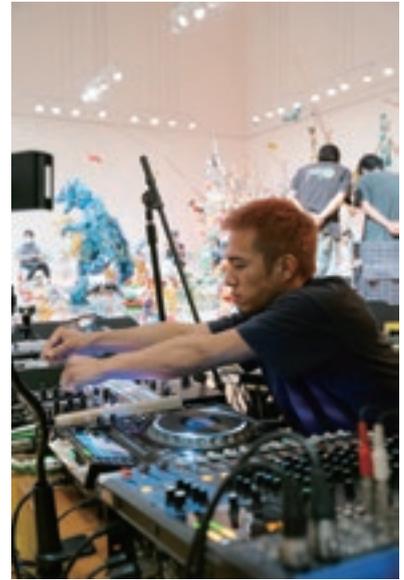
アーティストトーク



手話通訳を交えて実施



幅広い年代の方に参加いただいた



《めぐるいきものもり》の展示会場で行った音楽イベントSound Bath～音楽のおふろ～
誰もがリラックスできる空間、時間となった

【伊藤由美子氏による「勝平得之と私」語りと版画のワークショップ】

日時 令和7(2025)年9月20日(土) 13:30～16:00

内容 版画家の伊藤由美子氏を講師に迎え、創作木版画家・勝平得之(伊藤由美子氏の曾祖父)についての「語り」と「実践(版木を彫る・摺る)」で構成したワークショップ



勝平得之の作品について参加者とともに語る

【聞こえづらいつとの対話による鑑賞を考えるワークショップ】

日時 令和7(2025)年10月11日(土) 13:30~15:00

内容 聞こえづらいつとの対話型鑑賞実現に向けた「筆談鑑賞会」の試行と協議



手持ち資料とUDトーク画面をモニターに映して説明を行った



まずはじっくり鑑賞



作品を鑑賞して感じたことを「かく」

【《めぐるいきものもり》の変化を楽しみ観察するワークショップ】

日時 会期中

内容 自らが持ち寄ったおもちゃなどの素材を展示したり、欲しいおもちゃをよく観察して描くことで持ち帰ったりすることができるワークショップ



じっくりよく観察してほしいおもちゃを描く



よく観察し、描かれた作品489枚が並ぶ



【キンビココミュニケーターによる自主企画ワークショップ】

日時 令和7(2025)年9月28日(日)、10月12日(日)、11月3日(月)

内容 カフェ7階(カフェとワークショップ)
セルフサービスによる飲み物の提供と工作ワークショップ



思い思いの時間を楽しむ



小さい子どもも楽しめるワークショップ



たくさんのおもちゃたちが楽しんだ

〈展示作品〉

1 触れる版木

伊藤由美子氏が制作したメインビジュアルの版木を、今回は特別に“触れる版木”として展示。通常は触れられない版木に手で触れられる貴重な機会で、さまざまな来場者が版木の質感を通して作品世界を体験できる場となった。



細やかな彫りを手で味わう

2 これなんのマル? 国語・算数・理科・デザイン / 澁谷デザイン事務所+合同会社 運動

身近にあるはずの「○」が並ぶことで、普段見過ごしている形の面白さに気付かされる展示。何気ないものを改めてよく“みる”ことの大切さを感じさせる空間となった。



「これなんだ?」



見たことあるような、無いような…

3 版画家・勝平得之と伊藤由美子の物語

秋田が誇る創作木版画家・勝平得之と、そのひ孫である版画家・伊藤由美子氏との間に続く静かな「縁」をたどった。勝平得之が眺めた景色を、今を生きる伊藤氏はどのように見つめ、表すのか。作品を介して、家族の歴史と秋田の文化が重なり合う温かな展示となった。



エピソードを語る伊藤由美子氏



勝平得之が眺めたであろう、同じ“景色”を作品に

4 ボーダレス鑑賞空間 溢れ出す部屋／

NPO法人逢い・荘司久寿、藤井恵、NPO法人アートリンクうちのあかり

「ボーダレス鑑賞空間 溢れ出す部屋」では、当館の所蔵作品と多様な背景をもつ人々の作品を同じ空間に展示した。ひとつの空間に並べることで作品どうしの境界をつくらず、自然なつながりが生まれる構成となった。対等に展示された作品を前に、来場者は“違い”を区別するのではなく、多様な表現として受け取る機会となった。



多様なものの捉え方や考え方、感じ方に出会う空間



作品の背景にある多様なストーリーや存在に思いを馳せる



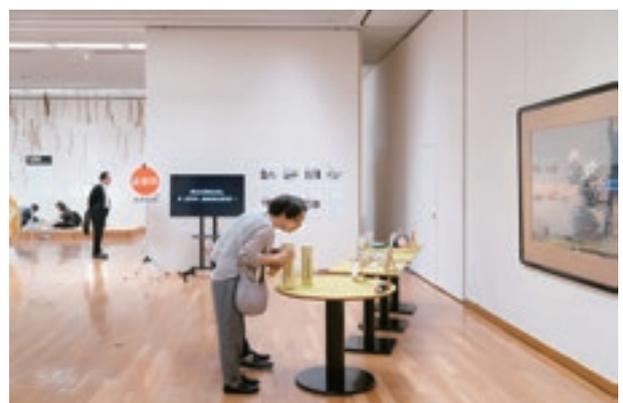
絵を描くスペースを設置



421枚もの作品が描かれた

5 「○」で見る《不忍池図》／秋田県産業技術センター、秋田協同印刷株式会社

《不忍池図》鑑賞支援ツール作成に関するこれまでの取組についてアーカイブ映像で紹介するとともに、《不忍池図》が「円窓のように景色を切り取る構図で描かれた」という説に着目した展示を行った。鑑賞者が丸い視界を体験できるように筒状のツールを設置し、○で見るという新たな視点を提案した。多くの来場者が楽しみながら作品への理解を深める機会となった。



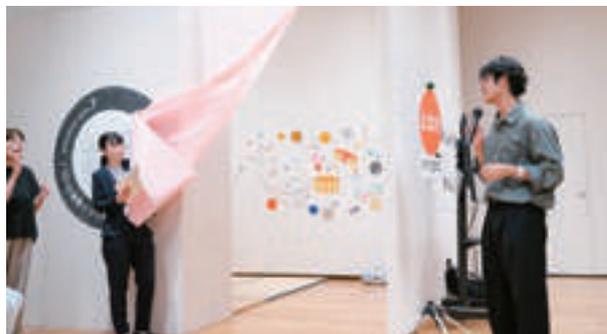
「○でみる」ツールを手に、新たな視点で鑑賞を愉しむ

6 「○」の世界でクリエイト／さくら国際高等学校秋田キャンパス

生徒たちが、〇＝無から生まれる無限をテーマに話し合いながら空間を構成した展示。昨年度の自由制作から一歩進み、意見を交わし合いながら空間をつくる過程そのものが学びとなった。作品づくりを通して互いの考えを受け止め、空間ができあがるまでの対話が生徒たちの成長につながった。



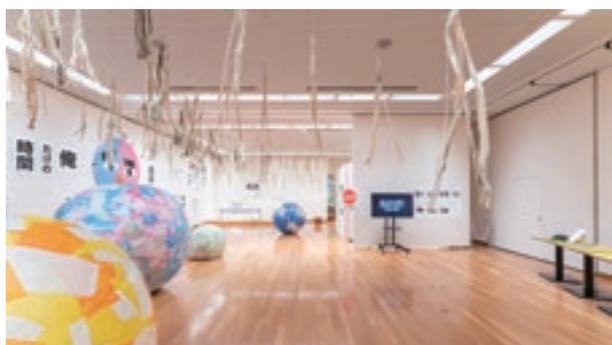
「無から生まれる無限」を精一杯表現した空間



仲間たちとの成長を語る

7-1 アートを通じた交流及び共同学習／秋田県立横手支援学校+秋田県立増田高等学校+十文字和紙愛好会

秋田県立横手支援学校と秋田県立増田高等学校の生徒たち、そして十文字和紙愛好会の方々が交流を通して共同制作した十文字和紙の大きな玉を展示した。思い思いの言葉や模様が書き込まれ、交流を通して気持ちが通い合う過程が感じられる。見る人に、人々の多様な在り方の理解や尊重し合うことの大切さを感じさせる契機となった。



直径200cm、150cm、120cm、100cm、80cmの玉が並ぶ



交流の思い出を語る両校の生徒

7-2 いたずら体験型作品 ポコポコ灯り 十文字和紙に穴を開けていたずらしちゃおう／十文字和紙愛好会

普段は行わない“穴を開ける”行為をあえて制作に取り入れた十文字和紙の作品。開けた穴をちぎった和紙でふさぐ過程を通して、和紙ならではの強さや柔らかさを体験しながら、参加者全員で作品をつくりあげた。



穴を開けて、草木染めの十文字和紙でふさぐ



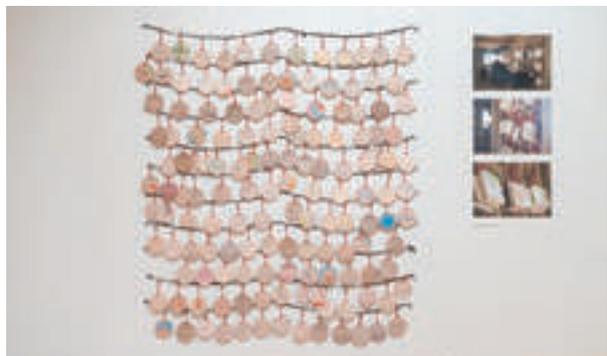
草木染めの和紙が重ねられて美しい

8 円馬に願いを

円馬は丸い形の絵馬である。参加者が自由に絵やメッセージを書き込んだ。円馬の展示の隣には、令和5年度のプロジェクトの企画展「大根ビネーション展」で制作された大根絵馬が、五城目の高性寺に奉納された様子を写した写真も並べた。



思い思いに願い事を書く



9 キンビオン出動!大作戦／ココラボラトリー（「かみこあにプロジェクト」との連動）

キンビオンは、昨年度のプロジェクト企画展「笑う!はひふへほ展」で誕生した“美術作品を必要とする場所へ届ける”段ボールロボット。今年度は「かみこあにプロジェクト」と連動し、現地で展示された。本展では、キンビオンが上小阿仁村へ向かうまでの道のりを映像作品として紹介し、プロジェクトの広がりつつなかりを伝えた。



映像作品を引き立たせる段ボールの額も今年度の作品



「かみこあにプロジェクト」での展示の様子

10 スイカのスマカ／坪谷奈摘美

会場のあちこちにスイカが潜む。見つけるたびに子どもたちが笑顔を弾ませ、探す楽しさが作品鑑賞や展示会場をより豊かにした。



「スイカをさがすのが楽しかった」との感想が寄せられた



会場や作品の中にスイカが

11 Donut!／秋田公立美術大学

Donut!のコーナーで展示された作品は、廃棄される塩ビ管や布を用いて制作された円形のベンチ。不要物を新たな形へと再生する「循環」を象徴している。また、異なる素材が組み合わせることで生まれる新しい価値や関係もイメージされる。素材として使われた塩ビ管も併せて展示し、会期中は多くの来場者の休息の場所として親しまれた。



休憩場所として座ったり、子どもたちが「くぐって」遊んだりする姿も見られた

12 Museum Link／秋田県立博物館、秋田県立近代美術館、秋田県立農業科学館、秋田県立美術館

秋田県立の博物館施設4館（秋田県立博物館、秋田県立近代美術館、秋田県立農業科学館、秋田県立美術館）が連携し、各館が所蔵する資料や作品を一つの空間で紹介した。分野の異なる館が協働することで、歴史・生活文化・芸術といった多様な視点がつながり、秋田の文化の広がりや循環を立体的に体感できる構成となった。



「〇」をテーマに、県立の博物館施設4館の資料や作品が並ぶ

13 めぐるいきものもり／藤浩志

《めぐるいきものもり》は、使われなくなったおもちゃや木片など、身の回りの廃材を素材として制作された作品である。本作では、5日間のワークショップを通じて、小学生から70代まで168名の参加者が藤氏と共に制作した。素材が新たな姿へと生まれ変わる過程に触れることで、「どこから来て、どこへ行くのか」という素材のルーツや、いのち、そして環境にもつながる大きな「循環」の視点を感じ取ることができる。また、会場には車椅子が設置され、来場者がそれに乗って鑑賞することで、歩行時とは異なる視点に気づく機会が設けられた。制作への参加や、車椅子による普段とは異なる目線の体感を通じて、来場者が環境問題や社会の在り方を「自分ごと」として捉える契機となった。



展示室いっぱいに広がる作品



車椅子でいつもとは違う目線の高さや感覚を味わう



ワークショップ参加者が制作した作品

【クロージング座談会】

日時 令和7(2025)年11月8日(土) 13:30~15:30

会場 秋田県立近代美術館

テーマ 年齢や障がいの有無等にかかわらず誰もが、人とのつながりの中で自分らしく暮らすために、Museumやアートができること

登壇者 阿部淳子氏(横手市市民福祉部まるごと福祉課・課長)

(五十音順) 安藤郁子氏(秋田公立美術大学・教授、NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事)

和泉 浩氏(秋田大学教育文化学部・教授)

澁谷和之氏(澁谷デザイン事務所)

藤 浩志氏(秋田公立美術大学・教授、NPO法人アーツセンターあきた・理事長)



「まるごと〇展」
クロージング座談会
アーカイブ

クロージング座談会

〈参加者アンケートより-1〉



- プロジェクトを長く続けると、内輪で納得するような雰囲気になりがちで、疑問や否定的な意見が相互には出にくくなると思うが、座談会では率直な意見や疑問も呈されていて、それが許容される場として素晴らしいと思った。
- 障がいのある児童生徒(特に特別支援学校在校生や卒業生)の表現作品の商業的価値を高め、広め、認められる社会を秋田でつくっていきたいと感じました。卒業後の新たな生き方、働き方の選択肢として確立したい。秋田市新屋を美大を中心としたアートの街にできないか、日頃から考えています。栗田支援学校もからんで、アートを介した共生社会のモデルにしたい。
- アート=美術(学校の授業)のイメージが苦手であった。座談会に参加し、アートの捉え方に変化があった。アート=居心地のよいルールのない自由な場所。これは我々が求める地域につながる。アートが地域作りになるのでは、というヒントになった。
- 近代美術館の深さを感じ、感動しました。誰もが自由に自分を表現できる、意見を言える、それを周囲が受け止める、認める地域作りができることを常に希望しています。
- 来館しなくてもアートにふれることができる出前展示は意義があると思った。3年間で近代美術館が身近になった方も多かったと思う。今後も活動が広がっていくような展示、ワークショップを期待しています。



たくさんの方に参加いただいた

- 私の苦手なアートの話でしたが、アートと関わっている人もアートが苦手だったり、嫌いと思う面もあるのだと知り、学問としてとても遠かったものが、そうではなく、身近にあるもの、自身を表現する手段の1つであり、どのような形であっても許されるものだということを感じた。
- 障がい者の作った作品の販売や、生きづらい人、同じ年頃の子が苦手な小中学生、年配の人、転勤族の奥さんなどの居場所になったら。
- いろんな人と一緒に絵を見るだけでも、折り紙を折るだけでも楽しかったです。近代美術館が横手にあって良かったと思いました。「まるごと〇展」は自分とは全く違う人生に触れたようで新鮮な気持ちでした。
- 実際の展示場所での座談会ということで身近に感じることができました。とても深い話で考えさせられました。全ての人に楽しんでもらう美術展の試みが難しいことだと思いますが、チャレンジされているのは素晴らしいと思いました。

クロージング座談会

〈参加者アンケートより-2〉



- 博物館施設の中でも一番近寄りがたかったのが美術館でしたが、今回その近寄りがたさを乗り越えたことが良かったと思いました。アートがどうあるものか、を悩み、新しく表現されたことで、他の施設ももっと身近なものになれば良いなと思いました。
- 人は成長とともにルールや常識に縛られ、本来、自由にパワーのある能力が弱ってってしまう。こういう自由な美術展が、その常識に問いを生み出すきっかけを作れる場になれば、人も世も変化していく。
- 公立美術大学のある新屋地区でみんなの語り場をつくろうと、地域の人を対象に西部包括支援センターの職員の指導のもと活動しています。いつか、美大の学生さんの作品を展示して、作品への思いなどをお話していただく会をやれないものかと考えています。
- 子どもたちが自身の興味の赴くまま、見て、触れて、考えて、楽しめる場であって欲しい。声を出してはいけない、触れてはいけない、走ってはいけない、を乗り越える場であって欲しい。
- アートや家族、いろいろな点で考えさせられた。衣食住「聞」の大切さ。各先生方の美術やこのプロジェクトへの愛が感じられました。今日のような会をもっと多くの方々に聞いていただきたいと思いました。誰でも楽しめる美術館であってほしいし、子どもたちがもっと美術館に行きたいと思える場所にして欲しいと思いました。
- 今までの美術館の印象が変わったと感じました。美術館が身近になり嬉しくなりました。多くのところへの出張展示など、関係者の方々のご苦勞が身にしました。胸がいっぱいになりました。
- まるごと〇展は、プロジェクト3年分の集大成を見た思いでした。今までしたことのない、新しいものをという産みの苦しみの中からでてきた一つの解決というか、ゴールになったのかな、と思いました。
- 美術館の作品だけでなく、地域の人々の表現にもスポットがあたると素敵だなと思います。
- なかなか出かける機会がない美術館ですが、今回は勤務先の利用者さんと一緒に見に来ることができました。オープニングイベントのアーティストトーク、皆さんの嬉しそうな表情と表現が最高でした。
- 美術館という概念が変わった気がしました。障がいのある方ももっとアートにふれる空間があることを望みます。
- 認知症になっても感情は生きています。こういった場所を作っていくことは素敵です。
- 様々な人々と関わりながら、従来の美術館の枠を超える試みをされてるのですね。地域課題の解決に取り組みられていることがすごいいと思います。キンビココミュニケーション養成の取り組みにとっても注目しています。
- ミュージアムのコレクションの様々な魅力や新しい見方を提示してくれる展覧会が見てみたいです。
- 美術館のイメージや在り方、見方が変わった。いろいろな腑に落ちる感覚があった。「まるごと〇展」は一回見ただけでは分からなかった。3年かけてこういう結果が導き出された、こういう結果になると思ってたか、聞きたい。こういう取り組みもあり、静かに絵を鑑賞できる場所でもあり、いろいろな場所であり続けて欲しい。
- 5人5色、様々な立場とアートと付き合いしてきた経験からお話が聞けて面白かったです。どれも納得できるものでありましてし、自分なりに浮かんだ疑問をゆっくり考えて生きたいと思いました。どこの美術館でもまだ答えを出していない問いかけだと思います。そして答えは一つでは無いと思います。今後、この近美がどうなっていくか楽しみでもあります。美術館内の方だけでなく、地域の訪れる私たちもどう付き合い合っていきたいのか、どう利用したのかを考えていきたいと思いました。
- 「美術館」や「美術館のルールの徹底」した中で、NPO、サークル、部活での美術館施設の利用。障がいのある子の療育の一環でできる音楽療法など、福祉サービスを行うところや子どもの医療で行う内容ができればいい。

〈みんなのMuseumプロジェクト企画 まるごと〇展〉検証会議

「みんなのMuseumプロジェクト企画 まるごと〇展」について、担当館である秋田県立近代美術館の学芸チーム、総務チーム、および解説員を対象に、本展の成果と課題に関するアンケートを実施した。この結果を踏まえ、12月2日(火)に副館長、学芸チーム、総務チームの職員および解説員による検証会議を開催した。以下に、その協議内容を要約して掲載する。

1. 展示内容と鑑賞体験について

[成果]

触れる作品、絵を描くコーナー、おもちゃの交換など「体験・参加できる展示」が子どもから大人まで幅広く好評で、リピーターの創出に繋がった。また、特別支援学校や地域の文化継承団体などとの繋がりを感じられる展示は、多様性を認める場としてふさわしい内容だった。

[課題]

展示室内でのペン使用による落書きや、ワークショップの音響や子どもの声などが他の静かな鑑賞を妨げる場面があった。企画面では、所蔵作品の展示をもっと多く求める声や作品の扱いや展示手法に関して「作品への敬意」を問う指摘がなされた。

2. 広報と周知について

[成果]

目を惹くチラシデザインや、横手市の定例記者会見を活用したPRは一定の効果があった。また、「半券提示で会期中何度でも入場可能」という仕組みは高く評価された。

[課題]

「〇展」というタイトルだけでは内容が伝わりにくく、問い合わせ等で説明に困る場面があった。デジタル情報に疎い高齢者や障がい者へ情報を届けるためには、ポスターだけでなく、福祉・医療機関と連携したきめ細かな広報や、マスメディアへの積極的な働きかけが必要だった。

3. 運営体制と職員間の共有について

[成果]

多くの外部関係者やキンビコミュニケータを巻き込んだ設営が大きなトラブルなく完了したことは、今後の足がかりとなった。

[課題]

補助金採択時期の関係で常に準備が「ギリギリ」となり、担当職員に負担が集中した。また、館内での情報共有が不十分で、担当者不在時の対応や、企画を外部に委ねることへの疑問も挙げられた。

4. 関連イベントの意義について

【成果】

筆談鑑賞会や対話ラボは、障がい者や引きこもり傾向にある方々が安心して交流できる場となり、社会包摂の観点から有効であることが実証された。

【課題】

準備不足から参加者が「身内」に限定されてしまった企画もあり、周知方法の改善が求められた。

5. 今後の可能性と持続性について

【出前美術展等アウトリーチの継続】

大学病院や学校への「出前美術展」は、癒しやリフレッシュの場として極めて高いニーズがあり、予算確保やメタバース活用を視野に継続すべきとの意見が多く出された。

【組織的な対応】

今後の持続に向け、3年間の試行錯誤を経て得た成果を検証し、館全体で支える持続可能な体制の構築が必要である。改正博物館法に基づき、地域の「文化的インフラ」としての役割を既存事業とともに整理、統合していくかの検討が必要である。

【作品を介した対話の場の創出と参加型プログラムの充実】

コレクション展や特別展において、鑑賞支援ツールを活用した展示や筆談鑑賞会、Artripなど、多様な来館者が参加できる鑑賞機会を継続的に設定していくことが求められる。本展や「みんなのMuseumプロジェクト」で培われた対話の場のづくり方や参加型展示の方法を、従来の展示と適切に組み合わせることで、障がいの有無や年齢にかかわらず誰もが鑑賞に参加できる環境を整備し、人と人をつなぐ文化的インフラとしての美術館の役割を強化していく必要がある。

8. 取り組みの評価とフィードバック、アーカイブの公開

秋田県立近代美術館を中核に、県立の博物館施設4館を含む多様な主体で構成された実行委員会を開催した。アートを含む文化芸術を通じた地域課題解決と持続可能な連携体制の構築について協議した。また、アーカイブの充実を図るため、各事業の取り組みをソーシャルアーティストの圓井氏が動画として記録・編集し、ホームページ上で公開した。

(1) 第1回みんなのMuseumプロジェクト実行委員会

- 担当館** 秋田県立近代美術館
- 実施方法** 書面開催
- 内容** 計画の策定と評価方法、目標の共有

(2) 第2回みんなのMuseumプロジェクト実行委員会

- 担当館** 秋田県立近代美術館
- 日時** 令和8(2026)年2月3日(火) 13:30~15:00
- 会場** 秋田県立近代美術館
- 内容**

秋田県立近代美術館にて第2回実行委員会が開催され、実行委員16名等が出席した。本会議では、Museumが孤独・孤立対策などの地域課題に包括的に対応する「社会的処方」の実践拠点として機能しつつある現状を踏まえ、持続可能な展開に向けた協議が行われた。協議では、不登校の若者や認知症の高齢者に対し、心理的安全性が担保された「安心できる居場所」に加え、役割を持って社会と関わる「参画の機会」を提供した実績が評価された。とりわけ、福祉行政との包括的な連携やアウトリーチ活動が、当事者の行動変容やウェルビーイング向上に寄与しており、Museumが地域社会をつなぐ不可欠なインフラとしての役割を果たしている点が再確認された。また、持続可能性の確保に向け、ファンドレイジング等の資金調達についても意見交換がなされた。企業連携においては「経済的合理性」と「社会貢献への共感」の両立が不可欠であり、丁寧なマッチングが必要であるとの認識が共有された。総括として、今後は県立博物館施設4館の連携を強化し、多様な人々が交わる「共生社会の拠点」として、本取組を地域社会へ定着させていく方針が確認された。



(3) アーカイブの公開

当館のホームページ (<https://akita-kinbi.jp>) にて公開

- 作成** ソーシャルアーティスト 圓井智哉氏



成果と課題・今後に向けて

ここではプロジェクト3年間の取り組みのまとめとして、各委員からの意見、各事業の関係者や参加者、博物館施設職員から寄せられた声に基づき成果と課題を整理し、今後の取り組みの方向性を示す。

- 主な成果
- 課題及び今後に向けて

1. 多様な機関との連携による社会的役割の拡大

〈福祉との連携について〉

- 福祉行政との協働により、美術館単独では接点を持ちにくかった若者や精神に障がいのある方、認知症を含む高齢者など、孤立しがちな人々へのアプローチが可能となった。福祉の専門職が窓口となることで、文化芸術を通じた支援の可能性が広がり、社会的処方の方針の基盤が築かれた。
- 社会的処方としての実践に向け、医療・福祉専門職との協働体制の構築と、多様なニーズに対応するプログラム開発及びその効果検証が必要となる。

〈大学・専門機関との連携について〉

- 大学や専門家との連携により、プログラムの質と信頼性が高まった。
- これまでの連携により得られた知見を地域に定着させるため、プロジェクトでの関係を超え、地域ぐるみでの情報交換や今後の協働の仕組みづくりが求められる。

〈技術協力によるアクセシビリティ向上について〉

- 技術機関との協働による鑑賞支援ツールの開発は、視覚に障がいのある方も鑑賞できる環境整備を進める上で、有効な契機となった。
- 鑑賞支援ツールを他の文化施設や教育機関でも活用できるよう、汎用的な設計やマニュアル化を進める必要がある。鑑賞支援ツールを活用し、障がいの有無に関わらず多様な人々が対話を通じて感じたことを共有できる場を整え、誰もが安心して参加できる鑑賞環境を実現していくことが求められる。

2. 地域課題への具体的アプローチと包摂的な学びの場の創出

〈社会的に孤立しがちな子ども・若者への支援〉

- 福祉行政との連携により、不登校や引きこもり傾向のある若者への支援が進展した。段階的プログラムと心理的安全性のある創作活動を通じて、参加者は高齢者との交流会を企画・運営するまでに成長し、主体性や自己肯定感を育みながら、社会とのつながりを築く一歩となった。
- 福祉的なニーズを抱える若者が安心して活動に参加し続けられるよう、文化芸術を社会的処方として活用した支援の場づくりと、それを支える持続可能な支援体制の整備が求められる。

〈認知症を含む高齢者への支援〉

- 認知症を含む高齢者を対象とした取り組みでは、対話型鑑賞や回想法を通じて発語や行動に変化が見られ、若い世代との交流も自然に生まれるなど、世代間のつながりを促す機会となった。
- 高齢者の心身の健康や社会参加を促進するために、社会的処方の実践として、博物館施設と福祉施設との連携を強化し、さらに公民館など身近な地域拠点での実施体制の整備が必要である。

〈障がい者支援から社会全体の理解へつなぐユニバーサル鑑賞プログラムへ〉

- 視覚や聴覚に障がいのある方との対話型鑑賞を実施し、障がいの特性に応じた支援のあり方を検討した。社会全体の障がい理解を深める教育的意義も明らかになった。
- 外見からは障がい分かりにくいことによる困難が共有され、社会の障がい理解を深める重要性が示された。今後はツール開発に加え、当事者の声を伝え、誰もが共に鑑賞できる機会づくりを進めたい。

〈包摂的な学びの場の創出〉

- 学校との連携により、Museumの資源を活用し、障がいのある子どもとない子どもが自然に関わり合う機会を創出することができた。この取り組みは、共生社会の担い手となる若者の育成にも寄与している。
- 学校と各博物館施設が無理なく取り組みを継続できるよう教員との連携を深め、それぞれの施設の特徴を生かしつつ、子どもの年齢や障がい特性に応じたプログラム開発をさらに進めていく必要がある。

3. Museumに求められる新たな機能の検討

〈「出会いと交流の場」の創出〉

- 参加・体験型展示やワークショップを通じて、来館者が主体的に関わる鑑賞体験が生まれ、Museumが出会いと交流の場として機能する可能性が高まった。五感を総動員した鑑賞や対話、創作活動を取り入れた体験は、障がいのある方や高齢者にも参加しやすく、誰もが安心して楽しめる環境づくりに寄与した。これらより、今後のMuseumにおいて多様な人々がつながる場を創出することの必要性を示している。
- 交流の場の創出には、職員の意識と対話や支援スキルの向上、情報提供の工夫などの支援体制の整備が必要である。今後は、障がい者団体や地域との連携・協働体制の構築を視野に入れた継続的な取り組みが求められる。

〈Museumの連携とアウトリーチによる地域共生に向けた取り組み〉

- 県内の博物館施設4館の連携とアウトリーチの取り組みにより、来館が難しい人々や文化芸術等への関心が薄い層にも働きかけることができ、地域共生に向けた一歩を踏み出した。
- 各館が有する専門性や資源を生かし、多様な来館者のニーズに応じたプログラムの協働での開発や、文化芸術を社会的処方として位置づけ、福祉・教育機関とも連携しながら、誰もが参加しやすい環境を支える持続的な連携体制を強化していくことが求められる。

〈Museumと協働する人材の育成〉

- 秋田県立近代美術館では、3年間にわたりキンビココミュニケーターの育成と実践支援を継続して行い、1・2年目は研修講座を中心に基盤を整え、3年目にはキンビココミュニケーターによる自主的なワークショップの企画・実施へと発展した。地域に開かれた学びと交流の促進に寄与した。
- 継続的な活動を支えるには、研修体制の整備に加え、活動拠点や連絡手段の確保、資金面の支援など、持続可能な仕組みづくりと運営基盤の強化が今後の課題である。また、県内の博物館施設との連携を深め、活動の場やネットワークを広げていくための具体的な仕組み作りについての検討も必要である。

〈人と人、人と地域をつなぐ共生の場〉

- Museumは、障がいのある方や不登校・ひきこもりの若者、高齢者など多様な人々にとっての「安心できる場所」としての役割が期待されている。心理的安全性のある空間での対話や活動を通じて孤立を防ぎ、「役割」の提供によって自己肯定感や社会的つながりを育む共生の場としての可能性が広がっている。
- Museumが今後、人と人、人と地域をつなぐ新たな役割を担うには、心理的安全性を支える対話や支援スキルの向上、プログラム設計や支援体制の工夫が求められる。さらに、福祉・教育・医療との連携による多様な声を反映した柔軟な仕組みづくりが求められる。

「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会設置要綱

(名称)

第1条 この会は、「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会(以下「委員会」という。)と称する。

(目的)

第2条 委員会は、「みんなのMuseumプロジェクト」(以下「みんなのMuseum」という。)の実施運営を行い、県立博物館施設を核とした多様な主体との協働による地域課題の解決を図ることを目的とする。

(委員会の事業)

第3条 委員会は、次の事業を行う。

- (1) 「みんなのMuseum」の実施に必要な企画及びその実施に関すること。
- (2) 「みんなのMuseum」の運営に必要な資金についての計画及び調達に関すること。
- (3) その他「みんなのMuseum」の実施に必要な業務。

(委員会の構成等)

第4条 秋田県立近代美術館 副館長 土門高士(以下「甲」という。)とNPO法人アートリンクうちのあかり 代表理事 安藤郁子(以下「乙」という。)は、第1条の委員会に委員を派遣する。

- 2 委員会は、別表の職にあるものにより構成する。
- 3 会長は、委員会を代表し、業務を統括する。
- 4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときはその職務を代行する。
- 5 会計については、委員会の事務を統括し、出納の責任者とする。
- 6 監事は、委員会の会計を監査し、収支決算を監査する。
- 7 人事異動等により構成員に変更があった場合は、後任の職務のものが任にあたる。

(構成員の任期)

第5条 任期は、委員会発足の日から事業が完了する日までとする。

(会議の招集)

第6条 会議は、必要に応じ会長が招集する。

(権能)

第7条 会議は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 委員会の目的を達成するための基本的事項
- (2) 予算及び決算に関する事項
- (3) 委員会の規約に関する事項
- (4) その他委員会の運営に関する重要な事項

(専決)

第8条 会長は、予算の補正その他緊急を要する事項について委員を招集し会議を開くことができないと認めるときは、これを専決することができる。

- 2 会長は、前項の規定により専決した事項について次の会議にこれを報告しなければならない。

(事務局)

第9条 委員会の事務を処理するため、甲に事務局をおく。

- 2 本会運営に関する急務が生じたときは、事務局団体がこれに当たる。

(事務局の設置期間)

第10条 設置期間は、委員会発足の日から事業が完了する日までとする。

(収入)

第11条 「みんなのMuseum」の開催に関する次の収入は、委員会の収入とする。

- (1) 「Innovate MUSEUM事業」補助金
- (2) 「あきたMuseum機能強化事業」負担金

(支出)

第12条 「みんなのMuseum」の実行に関する次の支出は、委員会の負担とする。

- (1) 鑑賞や創作を通じた社会的処方プログラムを開発に係る旅費や謝金
- (2) 「文化的なコミュニティづくり」に係る旅費及び謝金
- (3) 県立博物館施設による共生社会の担い手を育む「交流及び共同学習」の材料費・運搬費
- (4) 「みんなのMuseumプロジェクト企画 みんなのMuseum展」に係る委託費
- (5) 出前美術展に係る作品輸送・展示・撤去作業委託費
- (6) プロジェクトのアーカイブ化のための記録映像等の制作
- (7) その他実施に必要な経費

(金銭の管理簿)

第13条 委員会は、第11条に規定する委員会の収入を適切な金融機関に預け入れのうえ保管し、第12条に規定する支出を行う。

(決算報告及び会計監査)

第14条 収支決算報告等は、会期終了後に推定預金利息で決算し、会計監査を受けるものとする。

附 則

(施行年月日)

この要綱は、令和7年4月1日から施行する。

別表

「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会の構成員

- | | | | |
|-----|--------|-----------|--------------------------------------|
| (1) | 会 長 | 土 門 高 士 | (秋田県立近代美術館・副館長) |
| (2) | 副 会 長 | 安 藤 郁 子 | (NPO法人アートリンクうちのあかり・代表理事、秋田公立美術大学・教授) |
| (3) | 委 員 | 梅 津 葉 子 | (横手市市民福祉部まるごと福祉課包括ケア推進係・保健師副主幹) |
| | | 内 田 富 士 夫 | (秋田県産業技術センター 先進プロセス開発部・部長) |
| | | 瀬 川 侑 | (秋田県産業技術センター 先進プロセス開発部・研究員) |
| | | 岸 上 恭 史 | (秋田公立美術大学附属高等学院・教諭) |
| | | 柴 田 豪 | (秋田県立横手支援学校・教諭) |
| | | 糯 田 亜 希 子 | (秋田県立増田高等学校・教諭) |
| | | 黒 川 陽 介 | (秋田県立博物館・学芸主事(兼)チームリーダー) |
| | | 照 井 梓 | (秋田県立農業科学館・学芸主事) |
| | | 小 泉 俊 貴 | (秋田県立美術館・学芸員) |
| | | 内 田 鉄 嗣 | (秋田県教育庁生涯学習課・課長、秋田県立近代美術館・館長事務取扱) |
| (5) | 事 務 局 | 木 村 雅 洋 | (秋田県立近代美術館・主任学芸主事(兼)チームリーダー) |
| | | 保 泉 充 | (秋田県立近代美術館・主査(兼)学芸主事) |
| | | 北 島 珠 水 | (秋田県立近代美術館・学芸主事) |
| | | 照 井 裕 奈 | (秋田県立近代美術館・主任) |
| | 会 計 | 高 久 豊 | (秋田県立近代美術館・副主幹(兼)チームリーダー) |
| (6) | 監 事 | 長 谷 川 工 | (秋田県教育庁生涯学習課・主任学芸主事) |
| (7) | オブザーバー | | |

あとかき

令和5年度に「みんなのキンビ」プロジェクトとしてスタートした本プロジェクトは、3年目となる令和7年度「みんなのMuseumプロジェクト」へと名称を新たに、県立博物館施設4館が連携を深めながら、さらなる展開と推進を目指してきました。

文化庁「Innovate MUSEUM事業」には、毎年度申請し、採択を受け、秋田県立近代美術館を中核として継続的に取り組みを進めてきました。こうした継続性に加え、各年度で新たな視点や方法を取り入れながら活動を重ねることで、人口減少と高齢化が進む秋田において、博物館施設が地域の誰もが安心して暮らすための「人と人をつなぐ文化的インフラ」としての役割が必要とされていることに気付きました。

本プロジェクトが3年間を通じて大切にしてきたのは、博物館施設に気軽に足を運ぶことが難しい方々へのアプローチです。障がいのある方や認知症を含む高齢の方、不登校や引きこもりの子ども・若者たちなど、日常の中で文化に触れる機会が限られていた人たちに、アートに触れる場をつくるとともに、アートを介して地域の人々と出会い、触れ合う機会を育んできました。こうした取り組みを通じて、誰もが地域の一員としてつながり合える環境づくりを目指してきました。

令和6年度から取り組んでいる、社会的に孤立しがちな子どもたちを対象とした「キンビ美術部」の活動の中で、ある中学生が「何を話しても大丈夫な安全な場所がほしい」と語ってくれました。アートの前では、何を感じても、何を考えても否定されない。その多様性こそが価値であり、その価値を学ぶ場として美術館が機能し得ることを、改めて実感する言葉でした。

また、聴覚に障がいのある方々と開催した「筆談鑑賞会」では、音声を使わず、文字や絵を「かく」ことで対話を重ねました。振り返りの場で、外見からは分かりにくい障がいゆえに、日常生活で理解を得られずつらい思いをすることがあるとお話がありました。その言葉は、私たちがどれほど「見えているつもり」で、実際には隣にいる人の痛みに気づけていなかったかを考えさせられるものでした。一方で、その方は「こうした機会を通じて障がいへの理解が広がることを期待している」と語ってくださいました。

これらの経験を通じて、私たちは「対象に関心を寄せること」の重要性と、作品であれ、人であれ、関心を寄せることによって理解が生まれることを実感しました。子どもたちが安心して言葉を交わせる場をつくること、聞こえづらい方と筆談で思いを共有すること、視覚に障がいのある方と作品について語り合うこと。互いの感じていることを完全に理解することはできないということを前提としながら、それでも分かろうとする態度を大切に、互いの世界を想像し合おうとすることの大切さに気づかされる機会となりました。こうした対話の積み重ねをどのように育んでいくかは、今後、文化的インフラとして期待される博物館施設が検討していくべき重要な機能であると感じています。

最後に、本プロジェクトの推進に多大なるご尽力をいただいた実行委員会の皆様や団体の皆様、そして何より、この「みんなのMuseum」に集まり、ともに活動し、汗をかき、笑い合い、語り合ってくださいましたすべての参加者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。

これからのMuseumは、文化芸術を通じて誰もが安心して自分らしくいられる「みんなのMuseum」となることを目指します。これからも本プロジェクトが育んだ「〇(えん)」が、人と人をつなぎ続けていくことを願っております。

「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会事務局
(秋田県立近代美術館・学芸主事)

北島 珠水

【謝辞】

本事業の実施にあたり、たくさんの皆様からご協力を賜りました。
ここに感謝の意を表します。



「みんなのMuseumプロジェクト」

本事業は3か年計画となっております。これまでの取り組みにつきましては、当館ホームページをご覧ください。

**令和7年度 文化庁 Innovate MUSEUM事業(地域課題対応支援事業)
「みんなのMuseumプロジェクト」 令和7年度 実施報告書**

[企画・制作] 秋田県立近代美術館・学芸チーム 北島珠水、保泉 充、木村雅洋

[デザイン] 秋田県立近代美術館・学芸チーム 菅原 希

[印刷・製本] 株式会社グラフィック

[発行] 令和8年2月

[発行者] 「みんなのMuseumプロジェクト」実行委員会

〒013-0064 秋田県横手市赤坂字富ヶ沢62-46

秋田県立近代美術館内 TEL. 0182-33-8855 FAX. 0182-33-8858



無断転載厳禁

